

第3号

特集「JIBSNサハリン・リトリート2012」



(ユジノサハリンスク メガパレス・ホテルにて)

国境を越えるリトリート：稚内からサハリンへ

稚内セミナーを特集した第2号に続き、サハリン・リトリートの記録をまとめた第3号をお届けします。稚内からサハリンへと向かう旅は、セミナーだけのためではなく、ロシアの国境の島サハリン州の現実を JIBSN メンバーで知ること、また現地の方々と様々な実務・研究上の交流を行うものとして企画されました。本リトリートは、いわばそのフィールドトリップの一環として企画されたもので、稚内市のご尽力により実現したものです。

この初日のセミナーは、JIBSN のメンバーが、サハリンの多くを知る機会を与えましたが、同時にサハリンの方々にとっても「知られざる日本の境界地域」を学ぶ場を提供することになりました。会場は 60 人を越える参加者であふれ、現地のロシア人も様々な方々が参加し、発言をしました。特に地元でも著名なセルゲイ・ポノマリョフ氏が「大いに感銘した。次は是非、私たちと一緒にやろう」と声を上げられたのが印象的でした。



セミナーを追えた JIBSN 一行は、コルサコフやホルムスクなどを視察し、開発が急ピッチに進む島の現況とその背後に存在する様々な困難を体感しました。ロシアと向き合うことの面白さと大変さをおみやげに一行は無事、帰路につきました。本特集はセミナーの様態を中心に編まれています。リトリート全体を含めた DVD が近日、HBC フレックスによりリリースされる予定です。

(副代表幹事 岩下明裕)





サハリン・セミナー プログラム

8月28日(火) 会場：メガ・パレス

*通訳：大島剛(ルテニア)

09:30~13:00 第1部「北海道とサハリンとの交流の現状と課題」

- *挨拶 外間守吉 (JIBSN 代表・与那国町長)
ドミトリー・ハン (サハリン州政府)
今村光壹 (稚内商工会議所副会頭)
- *報告 長谷川浩幸 (北海道サハリン事務所長)
リュドミラ・マシュコヴァ (サハリン・メディア代理店「スペクトル」社長)
渡辺公仁人 (稚内市サハリン事務所長)
セルゲイ・ペルヴヒン (サハリン大学)
對馬雅弘 (みちのくカムパニーリミテッド代表取締役)
イワン・ショカリョフ (弁護士)

質疑応答

14:00~16:30 第2部「周辺地域における交流と取組」(2時間30分)

- *ロシア側報告
ジーナ・マカロヴァ (稚内クラブ)
インナ・ベスパレンコ (稚内サハリン事務所) ほか
- *日本側報告
財部能成 (対馬市長：上対馬とロシア人の歴史と交流)
木村崇 (京都大学名誉教授)：大東島とボロジノ村の歴史と交流
高田俊誠 (竹富町)：海洋基本政策と世界遺産・環境

質疑応答



境界地域研究ネットワークJAPAN サハリン・セミナー

日時 2012年8月28日 場所：メガパレス・ホテル

第1部「北海道とサハリンとの交流の現状と課題」（通訳 ルテニア 大島剛）

（岩下明裕）皆さん、おはようございます。今日は、朝からたくさんの方、特にロシアの友人たち、来ていただいてありがとうございます。私の名前は、岩下明裕と申します。北海道大学スラブ研究センターの者ですけれども、同時に、今日のこのセミナーを主催するJIBSNの副代表を務めております。

JIBSNは昨年11月に設立されました。日本の境界、すなわち、隣の国や地域と面した自治体の人、それからそれに対して研究をしている方々からなるネットワークです。これは地球儀でございますけれども、だいたい日本の境界と申しますとこういう形でございます。今日はこれらの地域の代表の方々が、ここのサハリンの地に集まっています。

私たちは、このJIBSN設立前にいろいろなこの日本の境界地域で、フォーラムを積み重ねてきました。例えば、韓国の隣に対馬という国境の島がございますが、ここで韓国や北米の方々とフォーラムをやったことがあります。昨年は、台湾に近い与那国という島でセミナーを開き、その後、飛行機をチャーターして台湾に行って、台湾でもセミナーを開きました。

今回は、稚内の皆さんの協力を得て、おととい稚内でセミナーをして、昨日フェリーで渡って、今日ここユジノサハリンスクでセミナーを開きます。それでは、我がJIBSNの代表を務めております、与那国町長の外間守吉様にごあいさつをお願いします。町長、よろしくお祈りします。

（外間守吉）おはようございます。ご紹介いただきました、与那国町の外間でございます。サハリンとはまだ距離を測ってございませんが、稚内と我が与那国とは2,871キロという距離でございます。今回は、このような形で、いろいろな国境地域に接する諸問題を解決するため、またそれが発展せしめる学術的な見地から、どうすればお互いの国同士、お隣同士がもっともっと発展するのかということテーマに掲げて、今日はこうして、皆さんと親しくお話をしたいということで参っております。

それでは、新たな社会的な貢献がどうできるのか、どう立ち上げていけるのかということ、皆さんからいろいろとお知恵を拝借しながら、今回のセミナーを進めたいと思いますので、よろしくお祈りを申し上げます。ありがとうございました。（拍手）

（岩下）このユジノサハリンスクでこういうセミナーを開く一つの理由は、ロシアの方は稚内の方と非常にお付き合いが深いと思いますが、日本とロシアだけではなくて、もっと日本のほかの端っこの地域の方々と交流をぜひ深めていただきたいからです。ということで、今日はある意味



で、皆さんの知られざる日本というものをご紹介するためにまいりました。

日本のどういう地域から来られているのか、主な地域の方々をご紹介します。ただ、時間がありませんし、日本人の名前をたくさん言われても覚えきれないと思いますので、地図を見せて、地域だけ説明します。ここは、与那国が台湾の近くですが、沖縄です。沖縄からは、この与那国の隣の竹富町というところの役場の方が来られていて、今日の午後に報告します。手を挙げてください。（拍手）

彼のコスチュームは非常にすてきだと思いますが、あれは「かりゆし」と言って、沖縄の公式の服でございます。それから沖縄本島的那覇から、大学の先生方が二人来られています。それから、対馬からは市長とその市役所の方が来られています。（拍手）

今日の午後に市長がロシアと対馬の非常に興味深い人と人の関係のお話を紹介してください。それから、福岡というのがこの九州にあって、この向かいに釜山という韓国の街があります。ここは昔、日本の船が行き来をしていた地域の一つなのですが、ある意味で、稚内とサハリンとの関係にも似た関係の場所があります。加峯さんと田村さんです。（拍手）

次は、はるか遠く、東京から1,000キロ南にある小笠原という島があります。そこの副村長と役場の方が、はるばる今日は来られています。皆さんには考えられないかもしれませんが、ここには飛行場がなく、飛行機で帰れません。つまり、25時間半かけて、船に乗ってこられました。つまり、東京からまたサハリンまで来るのにすごく時間がかかっていますから、日本の中では、「世界で一番遠い島だ」と言われています。

それから北海道の端、根室からは、銀行の方が来られています。どうぞ。まだたくさんの方が来られています。お時間ありませんので、それは後ほど懇親をしていただくことにして、それから稚内の方は皆さんよくご存じだと思いますけれども、後からご報告いただきます。それでは、日本側の紹介は取りあえずこれで終わります。サハリン州を代表して、副大臣のハンさんに今日は来ていただいておりますので、ご挨拶と短い報告をお願いいたします。（拍手）

(ドミトリー・ハン) 尊敬する皆様、そして尊敬するゲストの皆さん、おはようございます。本日のこの稚内、サハリン、境界地域の発展に関するこのセミナーの参加者の皆様に、あらためてご挨拶申し上げます。サハリン州政府の代表としてご挨拶を申し上げますが、両地域の交流の発展に特に大きくご尽力されております北海道庁に、あらためて感謝申し上げます。

北海道とサハリン州の関係というのは非常に古いものでございまして、この両地域の関係は、日露関係の地域間交流の輝かしい手本となっております。お互いの交流が発展する中で、経済、それから貿易、交通、観光の分野の新しい発展が見出されようとしております。

私どもにとってはあまりまだ知ることのなかった対馬や与那国の方々もいらっしゃっておりますけれども、そういう方々が、こうしてサハリン州に関心を持っていただけることは大変うれしいことでもあります。北海道との関係は非常に深いものです。去年は、稚内市とコルサコフ市の姉妹提携の20周年、そして稚内市とユジノサハリンスク市の10周年記念の年でありました。また今年

はネベリスク市と稚内市の40周年記念を祝う予定です。

そして来年は、北海道とサハリン州の友好と経済協力に関する提携の15周年が計画されており、それに合わせて、さまざまな興味深い行事を計画しています。このような緊密な関係は、日本とサハリン州の住民同士の相互理解や信頼関係、友好の発展にも寄与していくものと思っています。今回のセミナーの参加者の皆様のご成功と、それから皆様が考えていらっしゃる事が、今後、実現いたしますよう祈念申し上げます。ありがとうございました。（拍手）

それでは、次に報告の方に移らせていただきます。本日のこのセミナーでは、稚内とユジノサハリンスクの両市の関係をもとに露日関係の将来を考えるというテーマになっておりますが、サハリンと北海道の協力関係を考える中で、友好姉妹都市関係の重要な役割について、あらためて考えてみたいと思います。



現時点で、サハリン州と日本の間に、14組の姉妹都市があります。この姉妹都市関係というのは、今、友好とか人的交流ばかりではなく、経済面でも非常に発展しているということをあらためてここで話したいと思います。日本と申しますと、主たる私たちの貿易相手国でございますが、そういう日本との経済交流も貿易関係も着実に発展しております。

2011年のサハリンと日本との貿易額でございますが、65億ドルということで、これはサハリン州の対外貿易の40%に当たります。この成果は、主にサハリン1、サハリン2の石油ガスプロジェクトの恩恵ともいえます。日本には、石油の40%、それから液化天然ガスの60%を輸出しています。

北海道との関係については、経済交流に関する常設合同委員会、それからサハリン州と北海道



との友好と経済協力に関する提携をもとにして、関係が発展しています。来年は提携15周年です。今日さまざまな分野でしっかりした関係が築かれています。

北海道の企業は、こちらの天然資源、生物資源に非常に高い関心を持っています。サハリン州で漁獲された魚介類の3分の1は北海道向けです。北海道漁連はサハリン産昆布に関心を持っています。というのは、ほかの国から輸入する昆布に比較しまして、サハリンの昆布は品質が良いからです。

今まで漁業をやっていた会社が、昆布も手掛けるようになり、道経連に昆布を提供したり、道南伝統食品協同組合という団体にも見本として提供しています。北海道の方はサハリン昆布に関心を持っているのですが、残念ながら、現時点で輸出は行われておりません。

サハリン州の漁業会社は、北海道の水産加工技術に大変高い関心を持っておりまして、これを導入してサハリン州において水産物の高度加工を目指しております。

またサハリンと北海道の協力関係の中の一つに、建設分野の協力があります。合弁企業が設立され、北海道の寒冷地技術、耐震技術の導入が進んでいます。そのような建設会社としては「パシフィックエンジニア CO」、「イブラテック」、「コデックス」などがあります。

これらの建設会社が、ネベリスクの護岸工事、チャイボの防波堤や土木工事、それとユジノサハリンスクの住宅建設などに参画しています。今年はトマリ地区で北海道の防雪柵の試験設置が行われます。北海道のノースプランという防雪柵の会社がサハリン道路建設会社と協力して、トマリ地区で防雪柵の試験的な設置を行います。今まさに設置工事が進んでいます。

それから北海道企業との関係では、現在、北海道物産展がサハリンの大きなショッピングセンターで開催されています。また、貿易や観光の振興のため様々なイベントなどが行われています。サハリンの住民の皆さんも、このようなイベント、展示会などに多く来場しております。

サハリンの交通アクセスの改善や観光振興によって、今後のサハリン観光の可能性があると見ております。サハリン州を訪問する外国人観光客の中で、日本人の数が一番多いです。過去数年、同じ状況が続いております。観光の発展のために、双方とも大きな努力を払っています。観光の発展に欠かせないのが交通アクセスでございますが、航空路としては、ユジノサハリンスクー札幌、フェリー航路では稚内ーコルサコフがございます。しかし残念ながら、近年、このフェリー、それから航空路の利用率は非常に下がる傾向にあります。フェリーの乗客の減少は、一つにはビジネス関係の停滞にあると思っております。

ビジネス関係の停滞とは、新しいプロジェクトが始まらないことだと思いますが、石油、ガスのプロジェクトがないことで、日本側の関心が薄れていると言えます。ロシア極東地域といえますと、皆さんご存じのように、大きな変革を迎えております。経済、また経済基盤の近代化、そしてその再生を図っている最中です。その一環として、サハリン州でもさまざまな事業が行われています。

ロシア極東全体の変革に、日本のビジネス界、企業家もかかわってくれることを期待しておりますし、その中で重要な役割を果たしてくださることを願っております。アジア太平洋地域



諸国のパートナーの皆さんが関わる中で、日本の皆さんの役割が中心的な位置を占めるように願っています。

中小企業の皆さんのためにさまざまなプロジェクト提案があります。例えば水産分野においては、サケマスふ化場の整備、漁船団、水産物の輸送船団の近代化、サハリン州内における造船および船舶修理などがあります。

別のテーマとして、家庭ごみの処理があります。その一つとして、ユジノサハリンスクのごみ処理問題があります。北海道には、非常に高い技術がありますので、それも含めて、この分野で国際協力が進むことを願っております。また、国の住宅建設のプログラムの中で、2011年から2015年にかけて、耐震性のある住宅建設が進められることになっております。

このプログラムでは2012年に耐震性住宅を年間3,000平米建設することが計画されております。州内のさまざまな地域で、低層住宅の建設も拡大させる計画があります。この建設工事で日本の技術を使うことが一つの成功例になるのではないかと考えています。

観光分野も注目されています。これからの観光交流、これを発展させる中で、72時間ノービザシステムを積極的に使うべきだと考えております。今日、いくつかのプロジェクトについてご紹介いたしました。そういうプロジェクトに日本や北海道の皆様が関心を持ってくださることが、サハリン州と日本の各地域との協力関係の発展につながるものと考えております。私たちはいつでも皆さんと対話する用意がございます。そしてさまざまな話し合いの中で新たな展開をしていきたいと考えています。(拍手)

(岩下) ありがとうございます。今日の第1部の基調報告にふさわしい報告とご挨拶に感銘いたしました。第1部は北海道とサハリンの関係を中心に扱うわけですがけれども、午後からの第2部は、もう少し地方の話や人間交流の話になるわけですがけれども、そういうものを稚内の地であり早く進めてこられた稚内商工会議所副会頭の今村光壹様に、その第2部の予告も兼ねて、一言ご挨拶をよろしく申し上げます。

(今村光壹) ただ今、紹介をいただきました稚内商工会議所副会頭の今村でございます。このJIBSNの国と国とを結ぶ友好会議のセミナーに、こうしてサハリン州の方、あるいはネベリスクの理事の方、それと稚内クラブの方と一緒に会に参加できることを大変光栄に思っております。ありがとうございます。私ども稚内商工会議所は、サハリンとの経済交流は大変長い間、行っております。特に稚内は海に面しております漁業の町ですから、サハリン州ともこの魚での関連企業が大変多くありまして、この漁業経済を通してサハリンとのお付き合いを盛んにしていくところでもあります。

特に、この私どもの商工会議所で行っている事業の中で、今日まで続けている事業がロシア人の方の企業研修事業であります。これは1993年から続いておりますから、今年で19年目を迎えて、企業の研修生は今年で93名になりました。ここまで続けられたことは、一重に州知事をはじめ役



所の方々の大変深い理解と、ユジノサハリンスク市、ネベリスク市やコルサコフ市の市長さんの大変なご支援と市・行政のご協力によるものと理解をしております、心から感謝を申し上げる次第であります。

この事業を通して、私どもが「本当によかったな」と思っているのは、何と言っても、この私どもの研修を受けた方々が、それぞれの地区で、それぞれの町で、それぞれの企業で、第一線として大活躍をしているということであります。また、この事業を通して私どもが多くの方を得たということ、加えて信頼できるパートナーを築くこともできました。これは北海道にとっても稚内にとってもサハリン州にとっても、大きな成果だと思っております。

日本では、「遠くの親戚より近くの他人」という諺があります。これは、たぶん「近くの他人をもっと大切にしなきゃいけないよ」という言い伝えだと思います。「この事業はまだまだ続けていきたいと考えており、これからもたくさんの友人や信頼できるパートナーを多くつくっていきたい」と思っております。

今年1月、プーチン大統領は大陸とサハリンを結んで、その後に宗谷海峡を挟んで、サハリンと北海道宗谷を結ぶトンネルあるいは橋を造るということも可能だとブログでしっかりと書いておりました。それはサハリン州はもとより、この橋をつないで、トンネルをつなぐということは、まさに日本とユーラシア大陸が一つにつながっていくということを意味しております。

一つ一つの事業は誠に小さい事業なんです、プーチンさんが宗谷海峡を結ぶという発言を書き込みしていただいたのも、いわゆる地域が、小さくても一つ一つの事業を重ねていく、あるいはつないでいくことがとても大切なことだと思っております。

私どもの日本が、サハリン州を継いで更に大陸、ユーラシアをつないでいき、フランスのパリにも気軽に行ける日を夢見ながら、この私どもの事業も息長く続けてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いを申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

（岩下）ありがとうございました。今日のこのセミナーの主催は JIBSN ですが、もう一つ的主催が、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」でありまして、私がおその代表を務めております。JIBSNは日本を中心としたネットワークですけれども、世界にはいろいろなボーダーの研究をしている研究機関やネットワークがあります。しかし、ユーラシア、東アジアにはそれが存在しないので、それらをつなげるというのが私たちの使命です。

そういう意味では、ロシアというのは、私たちの分布世帯のネットワークの中で重要な場所でもありますので、JIBSNと同時に、ぜひ世界のボーダースタディーズのネットワークにサハリンの皆様も入って、ご協力いただくことが私の願いです。

私たちのプログラムの中で、JIBSNを発展させようとしているわけですが、先ほどお示しました、日本の各地の境界地域のDVDを作っております。今日は、対馬のDVDを持参しております。そのほか、小笠原や与那国など、日本語版だけではなくて、英語版も入っています。残念な



がら、ロシア語版はまだこれからですけども。

それから、世界にボーダーの研究協力関係をつくるべく、こういう境界を掘るというマグカップを北海道大学で作っています。今日はせっかくサハリン州の方がお越しですので、JIBSNの代表の外間会長から、ハン副大臣の方にこれをお渡しいただきます。（拍手）

それでは、開会式が終わります前に、JIBSNとして重要な方をあと3名だけ紹介をさせていただきます。JIBSNの事業部会長を務めています、名古屋にある中京大学の古川教授です。それから、こういうセミナーなど、企画をやるのは大変お金が掛かるわけで、大学のお金だけでやれないのですが、我々には強力なスポンサーが付いていまして、笹川平和財団の佐藤さんが来られています。ぜひ、サハリンの方でプロジェクトへご支援を考えている方は、後ほど、彼女に積極的にアプローチをしてください。

最後にもう一方、これはまだ来年の話ですけども、JIBSNの次のセミナーは、先ほど出ました長崎の対馬の隣にある五島という東シナ海にある島でやろうと思っています。その五島から来られている久保さんです。今日のセミナーの最後に、久保さんに少し五島のご紹介を皆さんにさせていただくことにしています。

それでは、これで開会式を終わらして、引き続き、北海道とサハリンについて、より詳しい報告をお願いしたいと思います。特に今回ロシアの方には、ビジネスをやられている方の興味深い報告を楽しみにしております。時間が限られていますので、一人8分から10分程度でお願いしたいと思います。それでは最初に、北海道サハリン事務所の長谷川所長からよろしく願います。

（長谷川浩幸） 皆さん、おはようございます。北海道サハリン事務所長の長谷川といいます。私はこの4月にここサハリンに来ました。私にとって初めての海外生活でありまして、緊張しながら、一人で飛行機に乗りました。飛行機の窓から初めてユジノサハリンスク市の景色を見たときに、たくさんの自然がありまして、山並みが北海道と同じように感じまして、とても北海道に近い国なんだと安心したことを今、思い出します。

今日は北海道とサハリンとの交流の現状と課題について、特に私たちの取り組みについてお話しさせていただきます。ロシア連邦、とりわけサハリン州は最も近い隣国でありまして、歴史的にも、また経済的にも密接なかかわりを持っておりまして、北海道にとっては極めて重要な地域であります。

特に私たちは、サハリン州政府の皆さんにさまざまな仕事でご協力をいただいております、大変感謝しております。北海道とサハリンは、北海道とサハリン州の友好経済協力に関する提携に基づきまして、友好経済交流促進プランというのを作成し、ロシア極東地域の中でも、特にサハリン州とは密接な交流を展開してきております。

現在は、来年から始まる新しいプランを作成しているところであります。北海道とサハリン州の交流につきましては、音楽やスポーツなどの交流は昔からありますけれども、最近では北海道

の建築資材による住宅の建設、販売などの事例も、少しずつではありますが増えてきております。

先ほどハン副大臣のお話にもありましたが、寒冷地技術の一つであります防雪柵のトマリ市への設置を今月23日に開始しました。完成予定は、9月末以降となっております。また、今月24日は、サハリン州政府の協力もいただきながら、シティモールというショッピングモールで北海道フェアを開催しまして、北海道の食品、また観光などのPRを行いました。

このフェアは、去年も行っておりまして、非常に大きな成果があったと考えております。また、フェアに来られた方々は、本当に北海道の食品に興味深く見ておられまして、こうした皆さんの姿を見ていますと、今後のさまざまな交流に明るい兆しが見えてきたのかなと感じているところであります。



特に今年は、シティモールとストリッツアの二つのショッピングモールで、アンテナコーナーを設置しております。10月末まで2カ月間設置しております、北海道のお米、ラーメン、あるいはお菓子などを販売しておりますので、ぜひ皆さん足を運んでいただきたいと思っております。

北海道とサハリン州は、さまざまな分野でまだまだ発展の可能性がありまして、これまで進めてきました経済交流の成果を基礎としまして、それぞれの地域にとってメリットのある新たな協力関係を築き上げられるものと確信しております。

こうした交流の拡大が期待される中、今後の解決すべき課題としまして、二つ挙げさせていただきます。一つはGOST認証、検疫、通関制度の簡略化、迅速化、もう一つは生鮮食品などを流通させるための冷凍、冷蔵用の保税倉庫の設置などコールドチェーンの確立が挙げられると考えております。報道によりますと、今月ロシアはWTOに加盟されると聞きまして、将来、このような課題が解決されることで、北海道とサハリン州の経済交流がさらに促進されるものと考えて



おります。

最後になりますけれども、北海道サハリン事務所はサハリン州政府の皆さんとの信頼関係を強化して、交流をより活発にさせるための拠点として、今から11年前にここユジノサハリンスク市に設置されました。私としましては、その11年間のサハリン州の皆さんとの関係を大切にしながら、北海道とサハリン州の交流がさらに活発になるよう、ここにいらっしゃる皆さんと協力していきたいと考えておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

（岩下） ありがとうございました。それでは次に、サハリンの制作会社スペクトルの社長のリュドミラ・マシュコヴァさん、ご報告をお願いいたします。

（リュドミラ・マシュコヴァ） 皆さん、おはようございます。本日、このセミナーにおいては、学術的な側面を考えながら、私たちが行っております実際的な仕事についてご紹介します。私どもの会社は日本の皆さんとすでに20年以上仕事をしており、協力関係を持っております。

1990年代に鉄のカーテンが開いて、こちらのテレビ取材班が日本に行けるようになりましたし、日本のマスコミの皆さんもこちらに来られるようになりました。そういう中で、お互いの生活に互いが関心を持つようになりました。実はうちの会社の専務であります夫ワロージャが、その取材班の一員で日本を訪問して、日本が好きになり、日本語を勉強し始めたのです。

これは20年前の話なのですが、この20年間一生懸命勉強した結果、ある一定の日本語のレベルになりまして、その日本語能力が日本の皆さんのお手伝いをする上で非常に役立っています。今村さんが「人と人との関係がとても大事だ」とお話しされましたが、私たちも仕事をする中で、信頼関係というのは一番重要だということがよく分かりました。時間の経過とともに、そういう信頼関係の中でこそ、お互いいい関係を築くことができると思っております。

実は信頼関係ができた後に、日本の会社の方々、日本のパートナーの皆さんと大きな共同プロジェクトを始めることになりました。この大きな共同プロジェクトの一つが、90年代、2000年代に行いましたサハリンにおける密漁の実態に関する取材でした。

取材する中で、こちらの当局の関係者、専門家の皆さんのインタビューをしたり、いくつかの具体的な現場を、リスクを冒しながら取材をしてまいりました。15年間、このテーマでさまざまな取材をしてきた結果として、今では日本の海上保安庁、こちらの連邦保安庁、国境警備庁の間にお互いの信頼関係ができて、情報交換ばかりじゃなく、共同訓練まで行われるような時代になりました。お互いのこういう機関同士の関係がどんどん改善されていくのを見ながら、たぶん私たちの取材も、ほんのわずかな貢献をしたのかもしれませんが、これに関わることが出来てうれしく思っております。

私たちの素晴らしい仕事のもう一つの成果は、我国の住民と日本の方々とのビザなし交流に関する情報収集の取材があります。今年5月にサハリン州と共同で「ビザなし交流20周年」をテー



マに、過去の映像資料をまとめて一つのDVDを作りました。長い20年間の交流の歴史の中で、ロシアの人々が日本を訪問し、日本の人々が我が国を訪問しています。編集作業中に自分たちの20年前の姿を見ました。非常にいいDVDができたと思います。

また、サハリン児童芸能団が稚内に行って、公演したことがあります。子供たちが初めて日本に行って、楽しく高揚感を持って踊る様子を私たちは映像として記録しました。ビザなし交流でも、子供たちのスポーツ交流が行われています。そういう子供たちが民間交流の橋渡しをしていると思います。まさに今後の両地域の関係は、このような人間関係が基礎となって出来上がると思っております。

サハリンのビジネスマンが日本に行って、ビジネスマッチングをしています。この会場には地元の建設会社スフェーラ社の代表も来ておりますが、日本に出掛ける際には、プレゼンテーション用の資料としてDVDやパンフレットなどを日本語で準備しています。それが信頼を早く勝ち得ることに繋がります。

今通訳をしている大島さんも翻訳のお手伝いをしてくれます。しっかりした資料を持っていくことによって、良い関係が早く出来上がる利点があります。高品質の映像資料は、日本側が決断をする上で、その決定プロセスが速める、スピードアップすることに役立つことは、今までの経験からよくわかっています。

それから、日本の企業も何か映像資料がないか、ビデオ資料がないかということで、私どもによく問い合わせがきます。例えば北海道銀行も当社所有の日本語コマーシャルビデオを見て、いろいろなことを知ることができたと思います。

北海道をはじめ、日本の人たちがクリル諸島の発展に高い関心を持っています。その中で、NHK、STV、大手新聞社の朝日新聞社から発注を受けて、クリル諸島の発展プロセス、例えば産業施設や社会インフラの整備状況についての取材を行っております。

私どもの撮ったものを日本の皆様が見て、「今、実際起こっていることを客観的に判断する上で非常に役立つ」、「実際に起こっていることについての新たに関心が深まる」と言ってくださっております。実はうちのラトビネンコ・ワロージャは、2週間前に東京に行って、クリル諸島の共同開発について非常に積極的に発言されております鈴木宗男さんの取材をしたばかりです。

それから、北方領土について東京の街頭でインタビューをしました。若い人が積極的に答えてくれました。「北方領土問題を知っていますか」、「この問題の解決法についてはどう思いますか」という質問に対して、多くの人たちが「その問題は知っていますよ」、「クリル諸島については共同で開発すべきだ」という意見が多かったのを覚えています。

また面白かったのは、例えば「結婚する相手としてロシア人の女性が奥さん、ロシア人の男性が旦那さんになるということについてどう思うか」という質問に対する答えが、「ロシア人の女の人はいきれいだし、ロシア人の男性についても日本の女の子がロシア人の男性に対する信頼の気持ちを持っている」ということも、今回の取材の中で記録されています。20年前は、こういう質



問に対して、みんなが非常に慎重に、警戒心を持って答えていたのを覚えています。また個人的な質問についてはまったく答えてくれなかったことも覚えています。

今、さまざまな話をしましたが、私たちテレビ関係の共同プロジェクトが、隣国の生活をより深く知る上で非常に役立っていると思います。私達の仕事は人と人との関係、人と人との橋渡しをすることを考えております。また、日本のマスコミがサハリンの人たちがどういう考えを持っているのかについて高い関心を持っています。

当社は東京に事務所を持っております。その事務所の中に日本の方々がサハリンや極東に関する情報を得られるような拠点を作りたいと思っております。こういう実務的な関係が今後、長い目で見た時、両国の関係の発展に資するものと思います。

当社は家族経営です。子供の中には日本語を勉強している子もいます。何度も日本に研修に行ったりして経験を積んでいます。今後さらにもっと実務的な関係を発展させたいと考えています。我が家には孫が二人います。将来的には東京大学で勉強してほしいという話をしているところです。

サハリンと北海道を結ぶ橋の構想がいつかは実現するものと思っています。この20年を通じて、私たちは情報の橋を少しずつ造っています。この情報の橋は「お互いをより深く知る」、そして「お互いをより理解する」ために非常に役立っていると思いますし、将来的には友好的なサハリンと日本の関係、ロシアと日本の関係にも役立つと思っています。岩下先生にお話ししておきたいのですが、ロシア語番組を作るときには言ってください。相当値引きして作ってあげます。どうもありがとうございました。（拍手）

（岩下）ありがとうございました。ロシア語版を作るという話は、大島さんのルテニアでも話があつて、私は安い方で作ろうと思っているんです。ぜひ、対馬の我々が作ったDVDを見て、後で感想を聞かせてください。

リュドミラさんの会社の役割というのは、非常に私は重要だと思います。北方領土問題という非常に難しい問題が日本とロシアにあつて、北方領土はサハリン州に今、属していることになっております。今、日本人が合法的に北方領土に行けるのは、ビザなし、パスポートなしの法定に基づいたグループ旅行だけで、大島さんはその通訳をよくやられているわけですが、一般の日本人は「行くのをやめろ」と言われています。

つまり、ロシアのビザを取って北方領土に行くということは、ロシア領だと認めることになるから、政府はそれを禁じているわけです。しかしこれは、北方領土を取材したい日本の新聞社やテレビ関係者、ジャーナリスト等も同様の制約を課せられているわけですね。

しかし、政治的な問題は難しいわけですが、実際に隣に住んでいる人たちがいて、そこで何が起きているのか、どういう暮らしをしているのかというのは、隣人として当然みんな知りたいわけですね。それで、リュドミラさんたちの会社が、そこでいろいろなリポートをして、日本のメディア、新聞にそれを提供して、日本の方々がそれを知ることになっているわけ



で、そういう意味では、普通の日本人が自由に行けない場所のことを、隣なので非常に重要なんですけれども、あまり知ることのできない場所を、私たちに伝えてくれるということで、非常に重要な役割を果たしてくださっていると思います。

今日は北海道以外の方が、いろいろなところから、日本中から来られているので、もし北方領土の映像をテレビで見ることがあったら、あれはきっとリュドミラさんの会社が作っているに違いない思い出していただければと思います。

さて、ユーラシアにつなぐトンネルの話が盛り上がっておりますけれども、トンネルは当然稚内を通るのでしょうから、ここでその橋を造っている、稚内のサハリン事務所の渡辺所長、よろしくをお願いします。

(渡辺公仁人) 皆さん、おはようございます。稚内サハリン事務所の渡辺でございます。本日は、当事務所の日々の活動につきまして、かいつまんでご報告させていただきたいと思います。当事務所は、2002年5月、ここユジノサハリンスクに事務所を構えまして、今年で丸10年になります。

当事務所の主な業務をご紹介させていただきますと、まず一つ目が、稚内の企業とサハリン州の企業との経済交流に関する支援。次に、サハリンには三つの友好都市がありますが、その友好都市とサハリン州政府との友好交流に関する連絡と調整です。それから、昨日多くの方が稚内、コルサコフの交際定期フェリーを利用されたと思いますが、そのフェリーの利用促進に関する取り組みです。

また、サハリン地下資源開発に関する情報収集をはじめとする、各種のサハリン関連の情報収集、稚内やサハリンに関する情報の発信、その他にもロシア側からさまざまな問い合わせや依頼が日々当事務所に舞い込みます。中でも経済交流に関しては重点項目ということで、稚内とサハリンの企業間の連絡調整、それから新たなビジネスチャンスについての情報収集に努めております。

事務所を開設した最初の数年間というのは、稚内に事業所を構える多くの企業の代表者の方々が、新たなビジネスチャンスを求めてサハリンを訪問いたしました。2004年、それから2005年にはユジノサハリンスクにおいて、稚内の企業による日本製品の見本市「トレードフェア IN サハリン」を開催いたしまして、日本製品のよさを知っていただくとともに、2005年、2006年には、サハリンの企業関係者を稚内に招き、商談や技術研修を実施して、ビジネスチャンスの拡大を図ってまいりました。その結果、現在もサハリン側とビジネスを継続している企業が数社ほどありまして、当事務所はそういった企業さんのお手伝いをさせていただいております。

稚内とサハリンは近いといっても、やはり日本とロシアということもありまして、ビザなしではなかなか簡単には行き来できません。それから、言葉の違いなどもありまして、スムーズに商談が進まないことがたびたび起こります。そのようなとき、当事務所を日露双方の情報中継基地という形で活用していただいております。



具体的には、稚内の企業がサハリンを訪問する際の視察や商談の日時の調整や、それから見積りの依頼、質問事項の翻訳、それから事務手続きの中継ぎなど、商談に関する間接的な支援を行っております。最近ではサハリン側からのパートナー探しの依頼も数多くなりました。

このようなときは、直接お会いして詳細なお話を聞いて、対応できるパートナーを見つけるように心掛けておりますが、ロシア側から売りたい商品が必ずしも日本側で必要としていないことや、日本側で販売できる商品レベルに至っていないことがしばしばございます。

一方、日本製品は、ロシアの方も性能がよくブランド力もありますが、最近の円高も相まって、国際競争力でいうと、中国、それから韓国製品に一步も二歩も引けを取っているという感じで、契約に至らないことがよくあります。今後、WTOに加盟するロシアのビジネス環境の変化にちょっと期待したいと思っております。

次に、先ほどちょっとお話しさせていただきましたが、サハリンに関する情報の日本向けの発信につきましては、1～3カ月に一度、日本のラジオ番組に私自身が出演しております。また、当事務所のブログ『アムールスカヤ通の窓から』で、随時サハリンについての情報を発信させていただいております。

次に、ロシアの方々からの問い合わせ等についてご紹介させていただきますが、当事務所には、昨年482名の来客があって、そのうち343名、70%強の方がロシアの方々でした。そのうち88名の方からさまざまな問い合わせや相談が寄せられました。

その中で面白いといえますか、ちょっと変わった相談も寄せられておりますので、一例をご紹介したいと思います。一つ目が、昨年の福島原発事故がございましたが、今年に入ってから、「放射能測定機を購入したいので日本の購入先を教えてください」と、また「日本製の体重計、それから血圧計を購入したので、使い方を教えてほしい」という話もあります。

それから「フェリーで旅行して日本に行きたいんだが、稚内から札幌までどうやって行ったらいいんだ」という問い合わせもあります。それと特に最近増えたのが、「日本の病院で治療を受けたいので、病院を紹介してほしい」という問い合わせです。今、紹介したような取りとめのないような相談も含めて、まさに「日本に関する駆け込み寺的存在なのかな」と考えております。

ここサハリンというのは、コミュニティとしてはとても小さなところだと思います。そのため、個人と個人のつながり、すなわち、信頼関係が特に重要視されているように感じます。そのためにも普段から業務と関係ないことについても、親身になって対応することがサハリンの数多くの信頼関係を築く最も近道であると感じています。同様に、サハリンでは信頼できる友人、知人などの紹介からビジネスチャンスが生まれることがしばしばございます。そういうことがありまして、日ごろからのロシア人の方とのお付き合いについては、プライベートも含めて大事にしております。

稚内市は、今年度もネベリスク、コルサコフ、それからユジノサハリンスクの各友好都市の間で、各種交流事業を精力的に実施しております。昨年コルサコフとは友好都市20周年、それからユジノサハリンスクとは10周年という年にあたったことから、さまざまな記念事業が実施されま

した。また、今年はネベリスクとの間で、友好都市40周年ということで、稚内、それからネベリスク双方で、記念式典が実施される予定です。稚内市は、今後もサハリンの各友好都市と最も近い隣人として、50年、60年、末永く絆を深めていかなければならないと思います。

当事務所の真の使命でございますが、当事務所が与えられた業務を誠実、かつ、しっかりとこなしていくことによって、フェリーの利用を増やし、それから稚内を経由したサハリンとの人的、物的交流を活性化することにあります。

言い換えれば、稚内の地域経済を発展させるための一助となることでありまして、ひいては、このことが北海道とサハリンとの経済圏の形成に結び付いていくものと考えております。以上が稚内市サハリン事務所の活動でございます。ご清聴、どうもありがとうございました。（拍手）



（岩下） 稚内のサハリンに対する熱い思いを存分に語っていただいたと思います。お互いの交流を進める上で、人の交流というのが非常に大事だとすると、観光が大きな目玉になります。次の報告は、サハリン国立大学で研究するかたわら、実務に関しても観光に非常にお詳しい、セルゲイ・ペルヴヒン先生にご報告をいただきたいと思います。

（セルゲイ・ペルヴヒン） 皆さん、こんにちは。本日は、サハリンと北海道の観光交流についてお話しします。観光のさまざまな統計によりますと、日本における旅行者の多くが、日本の国内、それからアジア地域に集中しております。

現在、日本の日本政府観光局の資料によりますと、約400万人の日本の観光客が中国に行っております。次に、大きな観光客の流れとしては、韓国と香港ですね。この2カ所で、約700万人の観光客がいます。それから、ハワイやグアムにも日本の観光客がたくさん行っておりますけど、



グアムだけで約100万人の日本人が行っております。グアムについては、全観光客数の90%が日本人になります。

ロシアに来る観光客といたしますと、ロシアは日本の観光相手国としては34位ということで、ベルギーとブラジルの間であります。ロシア全体で日本の観光客の数は8万人弱です。サハリンに来る日本の観光客数は、あまりよく見えませんが、増加傾向にはありません。

過去14年間の総数ですが、サハリンを訪れた日本人の観光客の数は、14年間で4万3400人、日本の人口の0.034%です。ただ、サハリン州に来る外国人観光客の中で占める日本人の割合は90.6%です。逆にサハリンの人たちも日本に行っておりますけれども、その数も残念ながら今減少傾向です。

サハリンの人たちも外国観光（海外旅行）によく出掛けるんですね。1998年に日本に行ったサハリン州の観光客の数は1,495人です。その当時、サハリンから外国に出掛けていった人たちの35.7%が、日本に行ったんですね。それに対して2011年はといたしますと、外国旅行に行くサハリン州の人たちのたった10%しか日本に行っておりません。

スライドの後ろの方で薄くなっているところ、これがサハリン州を訪れる日本人旅行者の数です。手前の濃い色、これがサハリン州から日本に行く観光客の数です。似たような傾向があります。双方合わせてこの14年間で、お互いに日本に来たりサハリンに来たりした人たちの日本人とロシア人の数は7万2450人なんです。

ロシア人と日本人の割合では日本人の方が多く59.8%です。サハリンと日本の観光、それはサハリンと北海道の観光にも当てはまります。なぜこういう衰退状態なのかということなんですけど、アンケート調査によりますと、日本の方々には「観光ツアーの料金が安い」というよりも、「提供されるサービスの質が低いにもかかわらず料金が安い」と答えています。

ただ、日本の観光客は、ほかの国の観光客と比べて消費の金額が2倍から3倍になるということで、優位性はあるんですね。受け入れ側としては日本人の観光客というのは儲かるんです。ただ、日本人は、ただ単にお金をばらまきに来るわけではありません。日本の方たちは高いサービス力を要求します。衣、食、住環境、そして交通手段と情報に関して高いレベルを要求します。

それなりの満足感、そしていい印象があれば、日本の観光客はそれなりに伸びがあるということになります。また、日本の方々には、日本の旅行会社からロシアの旅行会社を経由して旅行を手配します。間が多いのでさまざまな手数料がかかるから、どうしても値段が上がってしまうということもあります。かといって、旅行会社を通さないわけにもいかないですね。なぜかといいますと、今、宿泊予約だけでなくビザの取得が必要なので、「旅行会社を通さなければいけない」とアンケートに答えた人たちは言っています。

また、日本の方々には安全、衛生分野の情報がなければ心配します。残念ながら、サハリン、またはクリル諸島を訪れる観光客は、事前に安全に関する情報を取得することができていません。情報とはパンフレット、案内書、ガイドブックなどですが、日本語でも英語でもロシア語でもしっかりしたものがないのが現状です。



インターネットには日本人のサハリンの印象が書かれています。非常に面白い話もあります。

最初のサハリンに来た印象、「誰も英語をしゃべらない。日本語は誰も分かるわけがない」ということがまず第1の項目として挙げられるわけですね。22番目の印象として、「英語をしゃべれないだけではなく誰も英語を勉強したがない」ということまで書かれています。28番目の印象は、「日本人がここにいない。」—ここから分かることは、ロシアに関する、また「ロシア人に関する情報がきちんと日本に届いていない」ということになります。すなわち、自分勝手だろうという間違っただイメージがどうしても浸透してしまいます。

そういう日本人の間違っただイメージ、また逆に言えば、ロシア人の日本に関する間違っただイメージの隙間を埋めたいと思いますけれども、そういう問題を解決する方法として考えられるのが情報の伝達だと思います。取りあえず今ある技術を使って、双方が提供しなければいけないと思いますし、その際にやはり地元の特徴というものも十分に考慮しなければなりません。

ロシアにおいて、ブランドをつくるという力はまだまだ十分じゃないという問題があります。これは社会全体について言えることです。最終的に重要になってくるのは、やはり「政治的な意思がしっかりあるかどうか」、そしてまた「この問題の本質がどこにあるか」ということをきちんと理解する政治家だと思います。

かといって、本格的に観光を振興するためには、しっかりした観光インフラを整備しなければなりませんし、ただ単に宣伝すればいいというものではないとも理解しています。やはり観光振興の一つの可能性としては、まず場所とテーマを決めて、そのテーマと場所に合った大規模なプロジェクトを立ち上げるという方法があると思います。そういう観光の起爆剤になり得るプロジェクトの例を一つご紹介します。

これは2007年、2008年に始まって、そして2010年も引き続き継続しているプロジェクトですが、「樺太、大泊の知られざる家族のポートレート」という名前のプロジェクトです。これは実は、ロシアと日本の一般の人たちが集まった民間プロジェクトです。最終的に、このプロジェクトにかかわった人たちは、双方合わせて1万人近いです。サハリンがこの舞台になっておりますけど、実はサハリン以外でも動きだしています。

このプロジェクトの始まりはエカテリンブルクです。1940年代の後半、大泊に住んでいたある日本人家族が、たぶん日本に帰還するときに残していった家族のアルバムがもともになっています。アルバムには106枚の写真がありました。写真は鑑定しましたら、1904年から1910年にかけて撮られたものだったそうです。

このアルバムは、実はいろいろなロシア人の手に渡って、最終的に私の手元にあります。私の手元に来た時点で、私の友達と一緒にこれを本の形で発行しようと言ったんです。この写真を見ることによって、日本の人たちの生活、風俗が1945年までどういうものであったかが分かります。この本はエカテリンブルクのマスク社という出版社で発行されました。

2006年に本は出版されましたけれども、それほど部数は多くなかったんです。このプロジェクトには、ハンティマンシースクの国立自然人間博物館、ハンティマンシースク州対外関係委員会、



それからヒフラ文化局などもかかわっています。繰り返しますが、もともとはこのアルバムはサハリンにありました、でも発行はエカテリブルクでした。エカテリブルクで発行された後に、この本はハンティマンシースクまで来たわけです。そこでアルバムのプレゼンテーションが行われました。

プレゼンテーションを行った後に、初めて日本のジャーナリストが反応したんです。最初に反応したのは、モスクワに駐在している北海道新聞の記者です。北海道新聞で記事を書いてもらいました。それから、日本側のドキュメンタリーの映像監督のニシダという方が、この写真をもとにしてその所有者を見つけるというプロジェクトを立ち上げようとしたわけです。

その後、エカテリブルクの日本情報文化センターというところがかかわってきます。そうしましたら、最終的に、スヴェルドロフスク州の国際対外経済関係省がかかわって、「樺太と大泊の知られざる家族」という特別展が行われました。

エカテリブルクで特別展が行われたんですけども、その特別展をモスクワ在住のTBSの所長が取材に来たんです。龍崎さんという方だったんですけど、映像として撮影して今度は東京でそれを流しました。最終的には、エカテリブルクにあります八つのテレビ局も放映しています。

最後に私が申し上げたいのは、こういう形で歴史を振り返ることも一つの文化交流だと思いますが、こういうことが一つのきっかけになって観光交流、ビジネス交流のもとになり得るということです。ありがとうございました。（拍手）

（岩下） 大変面白い報告でもっと聞いていたかったんですけども、時間の関係で短くなりました。日本の方で関心のある方は、ファイルをもっていますので後でお渡します。稚内とサハリンの観光の現状のお話でしたが、プサンと福岡の交流と観光は何百万という単位でやっていますので、ぜひ午後の部の討論で福岡の加峯さんからのコメントをお願いできればと思います。

それでは次の報告にいきます。人の流れと同じように大事なのはお金の流れだと思います。みちのく銀行の對馬雅弘さん、手短にご報告いただければと思います。

（對馬雅弘） こんにちは。みちのくカンパニーリミテッドの對馬でございます。「みちのく」という名前は、サハリンでは非常に有名かと思えます。私も2003年11月から撤退する2008年4月まで、みちのく銀行（モスクワ）ユジノサハリンスク支店長をやっておりました。みちのく銀行現地法人は、日本の銀行として初めてロシアで営業した銀行でございます。

サハリン支店におきまして、だいたい300件ぐらいの住宅ローン、自動車ローン、フリーローン、それから事業性の預金を皆様に使っていただきました。当時日本の大蔵省では、ロシアに銀行を出すということ自体、非常に嫌悪感といいますか、言葉はちょっと悪いんですけど、「みちのく銀行は狂っている」と言われました。「リスクをどう取るんだ」という話になります。

しかし、実際、モスクワ、ハバロフスク、ユジノサハリンスク、3店舗でだいたい1,000件以上



の融資を実行しましたが延滞はゼロでした。大蔵省の検査のときも、「君たちは隠している、正直に言いなさい、不良債権ゼロのはずはない」というのが金融庁の検査官の常とう文句でした。しかし延滞がゼロなものもゼロなんです。それは、1994年からみちのく銀行がここで皆様とお付き合いをさせていただいて、皆様がみちのく銀行を信頼してくれた証しだと思っております。

その銀行員が見た、サハリンのビジネス環境と現状についてお話ししたいと思っております。日本のマスコミや人によっては「プロジェクト1・2が終わったので、もうサハリンの時代ではない」と言う人がいます。「サハリンではなくてウラジオ、ハバロフスクに進出すべき、そしてまた投資すべきだ」という声が多いのも事実です。

確かに極東ロシアの中で、ハバロフスク、ウラジオストクの人口は、国内の100大都市24位、25位という位置にあります。ユジノサハリンスクは18万人ということでベスト100にも入っていない、いわゆる小さいマーケットです。しかしながら、ここで銀行員として、経済の重要なポイントは平均賃金と進出銀行の数だと思っております。

数字がちょっと古いかもしれませんが、ロシアNIS貿易会の資料によりますと、平均賃金の1位はモスクワであると書かれています。サハリン州の平均賃金はと言いますと第4位と書かれています。ただし、ユジノだけ取りますと、モスクワを上回る数字になっています。実際進出している銀行の数を見ますと、みちのく銀行が撤退した2008年、このときは確か14行ぐらいです。ところが現在は、北海道銀行は駐在員事務所で営業しておりませんので除いても21行です。

特にロシアの銀行ランキング10行中8行が出ています。銀行というものは、経済の成長、俗な言葉ですけれども、儲ける場所でないと出てきません。そしてまたサハリンは、非常にまじめな方が多いです。それが先ほどの延滞ゼロということにもなるんです。日本の場合はローンを実行するときに借入契約書を書いていただくんですけど、その契約書というのはもう既成化されたものでほんの数ページです。

しかしサハリンの皆様はリクエストが非常に多く、また、貸し出しを受ける際も真摯な態度というものがその借入契約書に表れておまして、多い方ですと20数ページになります。また、最初から最後まできちんと文言を読んで、きちんと理解をしていただいてサインしていただいております。かえって日本の方が「後で私は聞いてなかった」といったトラブルが多いです。

これからは消費動向についてお話しいたします。これはサハリンの方はご存じですので、日本人の方向けにお話ししたいと思います。まずは自動車につきましては、日本のようにローンというものはございますけれども、金利が10数%なので、金を持っている人たちはキャッシュで買います。例えば明日シティモールをご覧になると思いますが、345万ルーブルのランドクルーザーが展示されており、それを当地の人はローンなしで購入しております。

また住宅についても、今アパートに住んでいる人が多いですけれども、やっぱり一戸建てに対して非常に大きな憧れがございまして、特に日本製のサイディングは、ここにいらっしやい



まず稚内の當摩社長がいろいろやられていますけれども、そういうニーズも非常に高いです。

それから、こちらでは不足しております青果物、果物、野菜です。中国から入ってきていますけれども、「北海道がこんなに近いのになぜ入ってこないのか」という声をよく聞きます。ですから、北海道庁、稚内市、それから民間を挙げてやっていけば結構なマーケットになるのではないかと考えております。

それから日用雑貨につきましても、やはり日本製に対する信頼度は高いです。値段も本当に日本の2.5倍とか3倍近くしますけれども、買って行きます。特にお子さんをお持ちの方たちは、洗剤アレルギーに敏感ですので、そういうニーズがあるのではないのでしょうか。

また、夏休みが長いものですから、3～4週間海外旅行に行きます。また人によってはその際に検診を受けたいという方もいらっしゃいます。モスクワまで数千キロですが、札幌ですと1時間ぐらいで着きますので、そういう医療ツーリズムのニーズも非常に高いです。

それから、やはりモスクワの目線は極東に向いておりますし、ハン副大臣の方からもお話がございましたが、サハリン州政府も州民のレベルを上げるといことで官民挙げて10項目をとにかく推進したいということです。結論から言いますと、ウラジオ、ハバロフスクありますけれども、やはりこれだけ近い距離、歴史的なつながりがございますので、まずはここサハリンから大陸を攻める、それが一つの手段ではないかと考えております。

最後に、自動車とか住宅とかありますけれども、当地で一番遅れているのはやはり金融サービス、いわゆる金利の高さ、条件の煩雑さだと私は考えております。できればいま一度銀行をつくって、皆様にローンをお使いいただくことが北海道とサハリンの経済交流の一番の近道と個人的に考えております。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

（岩下） 私はもともと中国とロシアの関係、中ロ国境地域を研究してしまして、ロシアと中国の間もずいぶん長い間金融が発達せずにお互い現金商売、ぼったくりのやりとりということが多かったんですが、最近はずいぶん変わってきていると思います。日本とサハリンもそういう銀行を通じた、運命的な関係が生まれることを祈っております。

午前中の最後のご報告です。取引、商売、そのほかビジネスが深まってくると、当然トラブルもたくさん起こると思います。日露ビジネスサポートネットワークで弁護士をされている、イワン・ショカリョフさんに今日はビジネスをめぐるトラブルの実態と、解決に向けての努力に関する忌憚のないご報告をお願いしたいと思います。

（イワン・ショカリョフ） こんにちは、皆さん。私は弁護士をやっております、1998年8月からサハリン州弁護士会の会員です。弁護士といいますが話が長いので有名なんですけれども、時間もないということなので簡潔にお話ししたいと思います。

北海道弁護士会とサハリン州弁護士会との間に友好協定が結ばれています。2010年に札幌市

長の上田文雄さんのところを表敬させていただいたんですが、上田さん自身も弁護士なんですね。私たちとこの弁護士同士の交流開始のきっかけをつくった一人です。北海道とサハリンの弁護士会の交流というのは隔年で行われております。例えば本年私たちが訪問すれば、翌年北海道の皆さんがこちらを訪問する、そういう交流です。

実はこの交流には若い弁護士もたくさん参加しています。日本側の方でも若い人たちを参加させようという方針でやっています。では、交流の中で何をやっているかということなんですが、お互いを訪問するときにはやはりその相手国の法律を勉強します。それから、国や地方自治体が関係する司法関係の機関、それとあと刑務所なども訪問いたしますし、お互い胸襟を開いて情報交換をしています。



こういう交流の中で、私自身も日本の弁護士の中に友人が生まれました。本当に私の前の発言者も言うておりました通り、一般の人たちの人的交流が行われております。

家族同士の交流もしているんですね。私たちが行くときも家族で訪問したり、そしてまた来たときにも家族で出迎えたりしています。私も結構、ちょくちょく札幌に行っているんですけど、札幌でスキーをしたり、スノーボードをしたりして遊んでいます。

それでは実質的に私たちがやっている仕事の一部についてお話しします。やはり地域同士の交流は貿易から始まりますね。取引が行われると何かトラブルが出てくるものなんですが、今日は主に税関手続きについてお話しします。日本側の税関手続きは簡素化されているんですけど、こちら側はちょっと問題があって、かといって前向きの動きもあります。

実は私たちの弁護士同士の協力関係から生まれた政治的な良い傾向があります。当然、ロシアがWTOに入るということも非常に大きな成果ですね。日本自体もWTOに入ったのは1995年1月でしたから、それほど古いとも言えません。WTOに加盟するというのは、さまざまな貿易の障



害というものを取り除くということが最終目的になっていますね。その障害として考えられるのが関税であり、また輸入枠の問題です。

時間の関係であまり長くお話ししませんが、専門家の予想によりますと、2013年後半にはロシア各地で外国企業によるいろいろな動きがあると言われていています。それはどういうことかといいますと、ロシアのマーケットにさまざまな大きな外国企業が入り込んでくるということです。

日本側の関税、税関の問題を考えるに当たって、電子手続きが大きな問題になってきます。21世紀にはスピードの技術の世紀でございますので、このスピードを持った技術を私たちは使っていかなければなりませんし、それで後れを取ってはいけないことだと思います。

電子税関申告が本格的に実現するきっかけになったのは、2002年の電子署名の導入だと思っています。電子署名が導入されて、それと同時にモスクワ南部の税関において、コンピューター、インターネットによる電子税関申告が始まりました。手続きというのはやっぱり官僚主義に非常に深くかかわっているものですから、新しいシステムが導入されたとしても、なかなかそれが浸透していかなかったという実態もあります。

2008年に連邦税関庁が新しい決定を下しまして、本格的に電子税関申告が動き出すこととなります。2008年に初めて貨物税関申告がインターネットでできるようになっています。2012年になって国内でも各税関に電子申告に必要な機材が整備されます。ロシアは2014年1月1日からは全面的に電子申告に変更になる予定です。

その手続きがどういう形になっていくかをお話しします。申告する人がコンピューターで申告書に必要な事項を書き込んで提出しますが、税関申告書、それから価格証明書、およびパッキングリストを同時に作ります。それらを税関の方で受け取った後、検査官が正しく記入されているかどうかをチェックして、間違っていたら申告者に戻して修正させます。

税関金額が間違っている場合には、修正させてもう一度正しい金額を記入してまた提出するわけですが。税関申告だけで通ればそれはそれでいいんですけど、これに税関検査が必要であるということになりますと、税関員の方から税関検査の実施をする必要性について通知して、それで税関検査を行って、その後、税関手続きが終了することになります。そして最終的には、搬出許可書が出されて税関手続きが完了します。

ただ、実務面の問題点として、実は今私が抱えているロシアの仲裁裁判所の仕事があります。これは「日本企業からロシア企業に対して、借金をしたのにそれを返さない、それを没収しなければならない」という内容です。これからの問題として、「ロシアの裁判所が決定したことの執行を日本国内でどうやって行うのか。日本の裁判所が決定したことをロシアの国内でいかに執行していくか。」ということがあります。

実は1965年だだと思えますけど、日本とロシアの間に商取引に関するお互いの合意ができております。それに従って自国の仲裁機関の決定を他国において執行することについて、ちゃんと記載（編集者注：1966年の「日ソ貿易支払協定」第8条か？）があるんですが、非常に古くて、また実効性がないんですね。そういう点で私たちは今後、法律家としてこれを今の時代に合った



形で実効性のあるものにしなければならないという課題を抱えています。

法律関係についてはもう一つあります。1958年当時はまだソ連邦だったんですけれども、外国仲裁判断の承認および執行に関する条約（ニューヨーク条約）という国際条約で、「一つの条約国で行われた仲裁判断は、別の条約国において執行されなければならない」と規定されています。この国際条約は、ロシアも日本も批准していますから、それによって本来であれば動かさなければいけないんです。

サハリンの民間仲裁については、最終的にサハリンの裁判所が決定を下すわけですが、それがどうやって執行されるかというところにまだ問題を抱えています。そういう面でもサハリンの私たち弁護士としても、この分野のパイオニアとしてこれから頑張っていきたいと思っています。ありがとうございました。（拍手）

（岩下） 長時間にわたり皆さんありがとうございました。プログラムにはディスカッションと書いてありますが、ディスカッションの時間がなくなってしまいました。しかし私はロシアの会議によく出ていて、「ディスカッションの時間も報告ばかりで議論なし」という経験がありますので、今日はロシア流ということで午前中はお許しいただければと思います。

午後のセッションはロシア語が非常に堪能な女性の研究者が司会をします。きっと鉄のむちを持って時間を制限して議論をつくってくれると思いますので、そのときに議論をしていただければと思います。

次の休憩の後は午後2時から時間通りに始めます。午前中は稚内とサハリン、北海道の経験を学ぶということが中心でしたが、午後はサハリンの方々に日本のいろいろな地域のことを学んでいただければと思います。それから稚内のサハリン、稚内クラブのロシア人の皆様方のご報告もあります。

このプログラムでは日本側、ロシア側と書いてありますが、日本側、ロシア側と交互にやっていきたいと思っています。最初に、対馬から来られた財部市長に、ロシアと対馬の非常に興味深い交流の話から始めさせていただきたいと思っています。

これで第1部を終わりたいと思います。すべての報告が非常に興味深く、勉強になる報告で、日本のJIBSNのメンバーも、稚内とサハリンのことは、これでみんな日本で一番詳しくなったので、各地域でサハリンのことを宣伝してくださると思います。ありがとうございました。すべての皆さんに拍手をお願いします。（拍手）



リトリートの風景 I



第2部「周辺地域における交流と取組」(通訳 ルテニア 大島剛)

(黒岩幸子) こんにちは。第2部の司会を務めます岩手県立大学の黒岩です。よろしくお願いいたします。第2部のテーマは「周辺地域における交流と取組」で、第1部よりも具体的な経験や歴史などを報告していただきます。今日は七つの報告がありまして、厳しく制限時間を定めます。それぞれマキシмум15分、通訳込みです。それで最後にディスカッションを持ちたいと思っております。

最初は財部対馬市長に報告をお願いします。日本では日露戦争の日本海大海戦と言いますが、ロシアでは対馬海戦と言いまして、『ツシマ』というノヴィコフ=プリボイという人が書いた歴史小説もあります。そのため、ロシアの方も対馬という名前を知らない人はいないくらいに有名です。それではお願いします。(拍手)

(財部能成) こんにちは。対馬市長の財部です。対馬沖でバルチックの艦隊と日本海軍の戦いがあったために、対馬という名前を冠する戦いになってしまい、対馬が有名になってしまいました。

実は1905年5月27日に今私が話をしました対馬沖海戦が勃発しております。私が今から話しますのは、その翌日のことです。不幸にもどうしても国と国の場合、争い事というのはこの歴史上どうしても起こってしまいます部分がありますが、今回は、そういう争いの後の人と人の関係とつながりというもののお話をさせていただきたいと思っております。

サハリンセミナー

「日露戦争の際の
上対馬ヒューマン
エピソードについて」

長崎県 対馬市



私ははるばるこの対馬からまいりました。おそらく2,000キロはあるんじゃないかと思えます。そこは対馬と言うのですが、対馬の位置は今示した通りでございます。今から話すお話は、この対馬という島、南北に82キロあります。そして東西に18キロです。なぜその数字がすらすら言

えるかといいますと、足すとちょうど100になるから覚えやすいからです。

対馬沖海戦はおおむねこのあたりで起こっていると思われています。今日お話しするのはこの場所で起こったお話です。1905年5月28日、そこでいろいろな艦船の中でヴラジミール・モノマフ号からロシア兵が脱出をしたことからこのお話が始まります。先ほど指した場所がこの突端になります。ここのことを総称して殿崎と言います。この場所にロシア兵が143名上陸をしてきています。実際上陸した場所はこの阿奈珥（あなじ）浜といわれる場所です。

1905年5月28日 沈みゆくロシア艦船 「ウラジミール・モノマフ号」から ロシア兵脱出



西泊地区の殿崎沖に異様な光景を発見

2

ロシア兵143名が上陸



現在の西泊湾

ロシア兵が上陸した殿崎の阿奈珥浜

3

実はこの阿奈珥浜の上に畑がずっとあります。1905年5月28日の朝、そこの地域の人が畑仕事をしていたそうです。「畑仕事を何でそんな戦争の真っ最中にできるの」とお思いでしょうが、戦争が起きていることもよく分からない状態だったと言われています。海の彼方で何か大砲の音

が聞こえるなという程度だったそうです。そのときに自分らの対馬には直接関係ないだろうということで、のんびりと翌日は畑、おそらく麦の畑仕事に出向いていたそうです。

ボートに乗って近づいてくる姿を見て、地元の地区の人たちには当然「異様な姿に映った」と書いてあります。おそらく今日、ロシアの方は対馬人の私を見るのは初めてだったと思います。私もサハリンの方を見るのは当然初めてです。余談ですが、今朝外に出ますとカラスがごみをつついていました。そして今日昼屋上で外を見ていましたら、ツバメが飛んでいました。ところがどちらも、対馬のカラスよりも、対馬のツバメよりも大きいです。そういうことで初めて見る別の国の感覚で、「え、誰が来ているんだろう」とおそらく畑仕事をしていた農夫たちは思ったみたいです。

体は大きいし、近づいてくると目の色が僕らと違う。まして、戦争の後で沈没する船から逃げてきていますから汚れています。しかし、やはり同じ人類同士ということで、その会った農夫たちはその若い乗組員たちに手を差し伸べております。その農夫が乗組員に対して最初にしたしぐさが、木の枝を折ってこうしたそうです。「たばこが欲しいのか」と言ったら、「いや、違う」と。「あ、水が飲みたいのだ」ということで、日本語で書いてありますが、水飲み場へまず案内します。次に汚れた服や肌着を洗濯してあげます。そして食事の炊き出しをし、たばこやお酒、そして泊まる場所を提供するということがありました。当然戦争ですからけが人が出ていましたので、お医者様に紹介するということがありました。



農婦が衣服や肌着を洗った「茂の井戸」現在も記念碑を建立し保存

6

最初の水飲み場というのはここです。これは井戸です。そのときには、この地区の方々も飲料水や生活用水として使っていた井戸です。一泊だけ先ほどの地区で143名の方が過ごされております。ロシア兵の方たちとの別れが来るわけですが、赤十字に渡したという記録だったと思います。ロシア兵の方もその地区の方々のもてなしに対して感激をし、缶詰をくれる人、いろいろな

手持ちだったナイフなんかを置いていく人がいたそうです。

そしてみんなが4隻のボートに乗り込んで、その地区から離れて、救護船に乗り移ろうとするのですが、そのときの光景というのは、「ボートのオールを全員が真っすぐ立てて、その地区の方にそれで感謝の気持ちを表した」と記録にはあります。地区の方々たちも一泊のお付き合いとはいえ、やはり情が移り、「船を出して港の外まで見送る人たちがいた」と言われています。

この1905年の出来事をその地区の人たちはどのような形で後生まで残していくべきかと考え、7年後の1912年に記念碑を建立しております。それがこの碑です。実は漢字四文字で「恩海義喬」という言葉が記されています。なかなか説明しづらい部分がありますが、恵みの「海」に「恩」ですね、それに「義は喬し」という言葉だったと思います。それからロシアの方では、この対馬海戦の家族会というのがサンクトペテルブルクで毎年行われていると聞いております。

その記念碑の説明する文字がもう風化してしまったものですから、今年あらためて碑を復元してこの地区に残すことを実行に移したところです。この地区は、ロシアの家族会の方と今もってずっとメールの交換等をやっているという報告を伺っております。この地区の中心人物の男たちの写真があります。「サハリンに行くなら俺たちの顔を必ずみんなに見せてくれ」というお願いがありましたので、あえてここに出します。

先ほど言いました上陸された阿奈珥浜はいろいろな漂着物が来るんですが、それも「きれいにしよう」と言って地区の人たちで頑張ってくれております。先ほど言いました阿奈珥浜というのはここになります。そして1泊宿泊した、水を飲んだところはこの近くで、オールを直立させてボートで出ていきました。実はその近くに今きれいな砂浜がありまして、三宇田海水浴場というところがあります。実は今までの話はこの地区のために言っているのかもしれませんが、サハリンからロシアの方たちがみんなここへ泳ぎにきていただければ、この地区もうれしいなという話です。私も市長という立場がありますので、観光客を増やすためにもご理解のほどをよろしく願います。

日本の歌手が歌を製作



財部市長と野田かつひこさん

西泊地区を舞台に
繰り広げられたロシア
兵を助けた美しい行動
を歌にし、日露友好の
親善に繋げたい

16



また、この方は実はフォークシンガーで、野田かつひこさんといいますが、このロシア兵の話聞いてどうしても歌を作りたいという話が持ち上がっております。このお話を日露友好の今後の親善につなげていきたいなという思いを、彼も私も感じています。もし資金に余裕のある方は、野田かつひこに資金の提供をよろしくお願いいたしまして、私のお話は終わりたいと思います。

私ども対馬は境界域とか国境とかいうところに位置しております。またこのような境界は争うことが多いのが結構あるわけですが、いくらでも人間同士仲良くできるねという話を皆さんにあえてしに来たところでございます。どうもありがとうございました。（拍手）

（黒岩） 日本でもロシアでもたくさん研究書で日露戦争については書かれていますが、こういうエピソードは意外と知られていないので、貴重な報告だと思います。

次は稚内クラブの代表のお三方にお話ししていただきます。まず稚内クラブの会長をなさっているマカロヴァ・ディナさんです。稚内クラブは今、会員がもう93名もいらっしゃるようで、稚内で研修を受けた方たちの会だということです。その稚内クラブに対応してサハリンクラブというのが稚内にあって、これはサハリンからいらっしゃる研修生を受け入れた方たちのクラブということで、その会長を今朝発表なさった稚内商工会議所の今村さんが務めていらっしゃいます。隔年毎にお互いを相互訪問し合って、明日はコルサコフでまた交流をし、来年はサハリンの方が稚内を訪問するそうです。それではお願いします。

（ジーナ・マカロヴァ） こんにちは。本日はこのような発言の機会をいただきましたこと、ご紹介いただきましたことを感謝申し上げます。同時に、ユジノサハリンスクの稚内クラブのメンバーには集まってお話ししてありがとうございます。研修事業は1993年から行われていますが、稚内クラブができたのは1998年です。各年、各姉妹都市から2名ずつ推薦を受けてこの研修事業に参加し、水産業、建設それから商業などの分野で、稚内商工会議所のレコメンデーションを受けて研修を行っております。

稚内クラブが創設されて最初の会長はのチーハナンさんですが、その方が中心になって各姉妹都市等の研修生の交流の調整を行っておりました。最初のころは3カ月の研修でした。先ほど言いました水産、建設、商業の分野において研修を、稚内で住みながら行っておりました。2000年から1カ月に期間が短縮されました。日本滞在中は日本の文化や日本人の生活についてもいろいろ勉強させていただきましたし、当然自分たちの専門分野の勉強もさせていただきました。

この研修事業の成果として、最初に合弁企業のワッコールがステツェンコさんを中心につくられています。このワッコール社は2001年から非常に順調にサハリン市内の建設業の分野で活躍をしております。ワッコール社は土木工事の免許を持っていますし、それから建築免許も持っております。サハリン2プロジェクトではLNG工場の建設工事、それから石油積み出し基地の建設にも関わっております。ネベリスクは地震の後に住宅の建設工事がありまして、そちらにも当社がかかわっております。それ以外にもさまざまな社会施設、スタジアムの建設工事も行われています。



2008年にはサハリン州知事のホロシャビンさんが、ワッコル社に対して、サハリン経済に貢献したということで感謝状を出しております。こういうワッコル社ができ、そしてまたこういう結果が出ていることが長年続いております研修事業の成果でもあります。私たちの研修の中で一番輝かしい成果でしょうね。

稚内クラブが研修の後でどのようなことをやるのかをお話しします。稚内クラブの会合は年に3～4回行われまして、それは稚内商工会議所のサハリンクラブ、企業の代表者を交えて会合を持っております。毎年6名ずつ研修を受けておりますから、毎年6名が稚内クラブに入ることになります。その人たちが入会するときは入会式というセレモニーを行っているわけですが、研修生の中に建築家がおられて、その建築家が稚内クラブのための特別なバッジをデザインし、商工会議所が作ってくださったんです。ですからそれぞれ素晴らしいバッジを胸にしております。本当に日ごろのご支援、新たな財政援助に対して、今村さんにはあらためてここで感謝申し上げます。

93名の研修生がいましたが、当然いろいろな事情があつてここから去ってしまう人もいますし、仕事、職を変えている人もいます。そういう中で実質的に活動しているのは68名です。93名のうちの68名ですから結構大きな数が残っていると思っておりますが、そのメンバーはコルサコフ、ネベリスク、ユジノサハリンスクのこの3市で時間をつくって来てくれております。

橋の建設についてお話がございましたが、私たちは友好の橋を自分たちでも造りました。その友好の橋というのは、毎年毎年どんどん強固になっています。商工会議所、稚内の企業の皆様にあらためてここで感謝申し上げますが、もしよければ一つだけ問題点を述べていいでしょうか。この研修事業は主に夏に行われるわけですが、建設とか漁業、水産関係は夏場が最盛期で非常に忙しいです。それと休暇の季節が重なったりして、この研修事業の実施時期を秋とか春とか、もうちょっと時間をずらしていただけないかという希望があります。

それから私はクラブの会長をしているわけですが、クラブとして大人数なものですから、すべての情報を持っているわけではないです。そういう意味で本日私の後に稚内クラブの第1回目の研修生、それから第20回、すなわち平成24（2012）年度の研修生、帰ってきたばかりですが、この2名に発言をさせていただきたいと思っております。どうもありがとうございます。（拍手）

（黒岩） 続けて発言してもらおうのがタチアナ・アクロワさんです。それからその後にニコライ・ヴォストロフさんをお願いします。

（タチアナ・アクロワ） 私の名前はタチアナです。こんにちは。（拍手）つい最近、20年前まで私たちは日本のことをほとんど何も知りませんでした。地図上でも、歴史上で、また歌も、それから労働組合の運動、もうこれについて何も知りませんでした。

私は1994年に稚内商工会議所の研修プログラムで稚内を訪れることができました。当時ロシアは厳しい時代でした。建設工事なんかはほとんど全部止まっていました。中田組とそれから藤コ



ンストラクトという二つの建設会社に、私が稚内にいるときにお手伝いをさせていただきました。非常に興味深い研修プログラムでありまして、北海道の北部における建設工事のさまざまな現場を見せていただきました。

ある発見がありました。ロシアで建設専門家といいますが非常に幅広い専門分野を持っています。例えば私は「安全管理も知っていますね。構造も知っていますね。それから工事の事務的なところもよく知っていますね。」とよく言われました。研修の中でいろいろな討論しながら研修をするというのが結構ありました。ですから「うちの方はこうだよ。おたくの方はどうかな。」といった研修を日本で受けたおかげで、その後私はこちらに戻って積極的に建設業で活動できるようになりました。国際的なプロジェクトでありますサハリン2の枠内での工事にも参加することができました。ラッキーだったのが、このプロジェクトの液化天然石油ガス掘削現場の工事からの全工程を見ることができたということです。CTSD、これはサハリン2プロジェクトの下請けをやられた日本の会社ですが、そちらで私はスズキさんの指導の下で品質管理という仕事をすることができました。

そういう経験の中でやはり国際的な基準というものを、ロシアの基準にどうやって合わせるかというのが非常に大きな問題だったのです。というのは国際的なプロジェクトだったとしても、そこで造られたものは、最終的に建設工事が終わって引き渡しをする際には、すべてロシアの基準に合わせなきゃいけないからです。

私は日本の経済発展に、本当に小さいとは思いますが、ちょっとした貢献をできたと思っています。というのは、このプロジェクトが動きだしてガスと石油が今日本に出荷されているからです。今現在はワッコールで仕事をしています。現在この会社には研修生が3人います。今は品質管理部ですが、ワッコールは非常にしっかりした事業を展開しています。他のサハリンの建設会社とは違います。LNG工場の関係で建設現場、また実際に建設されたものを見る機会がたくさんあったわけですが、そういう中で我が社の優位性を感じております。あらためて稚内商工会議所、そして稚内市、そしてまたこの研修事業が始まって、そしてまた継続している中で、いろいろ支援してくださいました日本外務省に対して感謝申し上げます。(拍手)

(ニコライ・ヴォストロフ) こんにちは。はじめまして、私はニコライです。(拍手)

私は稚内商工会議所の研修生でした。稚内では研修を受ける機会をいただいたことに対して、あらためてここで感謝申し上げます。特に日本の方々には温かく、そしてまた意欲的に迎えていただきました。そしてまた研修中はいろいろな面で温かくご支援いただきました。稚内商工会議所の皆さん、そしてまた中田組の皆さんに、あらためて感謝申し上げます。

いろいろなものを見せていただいて、迎えてくださった方とお知り合いになったばかりではなく、本当に仲良くなることもできました。日本に対する非常にネガティブなステレオタイプのイメージを、今回打破することができまして、本当に隣の友好的な良い日本を知ることができました。残念ながら政治的な理由があつて、日露の間ではまだ平和条約が結ばれておりませんけれど



も、こういう研修が続いて、多くの人たちが日本を訪問し、また日本の多くの人たちがサハリンを訪問することによって、平和条約を結ぶことがあくまでもフォーマルな、ただ単に形式的なものになっていくことを願っています。友達はお互いに攻撃はしません。これからも日露関係が発展して、そして強くなっていくように願っています。

稚内はとても気に入りました。また行きたいと思っています。(拍手) この街は私にとって感激をもたらしてくれる街です。街にはたくさんの記念碑が残っていますね。そしてまたそういうものを大事に皆さんが守っていらっしゃいます。それは何なのか。皆さんが歴史を忘れないということだと思います。過去を忘れた国は将来に存続する権利がないと言います。ありがとうございます。(拍手)

(黒岩) 3人の報告者の方、ありがとうございました。これで稚内クラブがどういうものかというのをよく知ることができました。次は、インナ・ベスパレンコさんに報告していただきます。彼女は稚内サハリン事務所で仕事をしていらっしゃいます。お願いします。

(インナ・ベスパレンコ) 皆さん、こんにちは。あらためて自己紹介をさせていただきます、私はインナと申します。現在サハリン稚内事務所で仕事しております。稚内市サハリン事務所で私が仕事を始めたのは2009年12月からです。今日まで一度も、私はこの仕事の選択したことが間違っていたと思ったことがありません。まさに稚内市サハリン事務所の仕事は、多種多様であって充実した非常に楽しい仕事しております。

仕事の内容としては、さまざまな事業がありますが、例えば少年少女そして青少年の代表団の交流事業などがあります。これはスポーツ、文化それから語学研修などの事業です。次に、公式代表団の相互訪問がございます。例えば毎年フェリー航路に関する会議や経済問題に関する会議が行われています。さまざまな分野での研修生の研修事業、専門家の研修事業もあります。フェリー航路に関してのさまざまな会合も持たれております。

稚内市サハリン事務所は稚内とその姉妹都市の間の連絡調整の役割を担っています。そして稚内市とその姉妹都市の協力の活性化のお手伝いをしています。稚内市の事務所には、今サハリン州のさまざまな街の一般の方々が個人的な形でいろいろ相談に来ます。いろいろな問題について話をしてくるわけですが、その際にいつも日本側は前向きに受け止めて、支援や援助もくださっています。そういう部分を見ますと本当に感謝の念、そしてまた感激の念に耐えません。

また、二国の文化やそれから生活習慣を理解するための合同の文化交流事業も実施されております。実は仕事を始めた当初、やはり文化の違いからいろいろ理解できなかったこと、私自身が理解できなかったこと、また私を理解していただけなかったことも何度かありました。しかしこの事務所で仕事をしていく中で、徐々に自分の経験やつながり、そしてまたさまざまなすてきな人々と出会う中で、少しずつ日本の文化を理解、認識できるようになり、非常にうれしいです。

通訳としての仕事に就いたのですが、私は通訳として情報を正しく伝えることは当然ですが、

そのしゃべっている言葉の意味、そしてまたその気分まで伝えるべきだと思っています。両国の間では本当に少しずつ協力関係が今発展していておりますが、そういう中でやはり相互理解を担う自分の通訳としての仕事の中で、言葉だけではどうしても足りないことがあります。そういうときにはやはりエモーション、喜怒哀楽というものも含めて言葉に深みを持たせるように努力しています。

お互いに会話をしている人たちの間で、その雰囲気づくり、そしてまた相互理解をつくるに当たって、私としては架け橋を受け持つ者として、その会話している人たちの間に見えない透明な橋を造ってあげたいと常に思っていますし、その橋を強いものに、そしてまたより幅広く造ってあげたいと感じながら仕事をしています。日本の諺に「千里の道も一歩から」がありますが、少しずつ前に進んでいきたいと思えます。

稚内市サハリン事務所は両地域の交流、協力関係をつくる上で非常に重要な役割を果たしています。そういう重要な役割を果たしているところで、直接的に仕事にかかわれることを私自身うれしく思っています。ここで仕事をしている中では、本当に言葉には表現できないほど素晴らしい経験を積ませていただいておりますが、その経験も日々大きくなっています。

今回の報告に対して、私は感謝とそれから敬意をまず、このような非常に大事な仕事を、私を信用して私に任せてくれた、そしてまたその大事な仕組みにかかわらせていただいた稚内事務所の皆さん、それは具体的にはサハリン課長の佐藤秀志さん、それから現在の所長であられます渡辺公仁人さん、そして私が事務所に入ったころの所長であられます齋藤実さん—皆さんが私にとって非常に興味深い、そしてまた多種多様で非常に大切な、とても素晴らしい刺激を得る扉を開けてくださいました。この稚内事務所で仕事をさせていただいていることに感謝を申し上げます。あらためて本日のセミナー参加者の皆様の有意義な、またこの会の成功をお祈り申し上げまして、私の報告とさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

（黒岩） 今、稚内のサハリンにおける存在感を遺憾なく見せていただきましたので、ここで小さな記念品の贈呈を行いたいと思います。（拍手）





(黒岩) では、また日本側の報告に移りまして、木村崇さんをお願いします。

(木村崇) 私の報告は「ボロジノ諸島発見の教訓」についてです。それでは始めます。

ロシア語の世界地図帳を適当に選んで、日本の南の島々である沖縄諸島の載っている頁を開いてみて下さい。次に那覇市の東400キロメートルあたりに目を移して下さい。すると広い太平洋に「ボロジノ諸島」という名前の小さな二つの島があることに気づくでしょう。本日の私の報告は、これらの島にちなんだ、面白くもありまた教訓的でもある日ロ交流の歴史に関係するものです。

ロシアの地図制作者たちはなぜ、今にいたるまで日本の島をロシア語の名前で呼んでいるのでしょうか。もちろん日本語の「大東島」という諸島名を並記することを忘れてはしないのですが、実は1820年8月20日（新暦では9月1日）の朝、露米会社船籍の艦長であったザハール・イワノヴィチ・ポナフィジンが発見して以来、この二島は世界の地図上では長い間ロシア語やフランス語、英語などで「ボロジノ諸島」と記されてきたのです。島名が改められたのは1885年、日本政府が国際法に基づいてこれらの島々を日本領に編入した時のことでした。これらの無人島に最初の入植者が上陸したのはそれから15年後の1900年でした。

今日では南大東島に1,200人強、北大東島に500人強が住んでいます。ちなみにこれらの島々の住民の平均収入は、沖縄のすべての島々に住む住民たちの中で最上位にあります。ここでの主要産業は、沖縄のほかの多くの島々と同じく製糖業です。

太平洋の地図にこの二つの島が記載されたのは、1826年発行の『東大洋北部アトラス』が最初です。これはサンクト・ペテルブルグの国立海軍局製図部によって作成されたものです。地図作



成を監修したのは海軍中将で水路図作者のガヴリール・アンドレーヴィチ・サルィチェフです。これより少し後になりますが、同じ年にこれもまた豪華な大型装丁本の『南大洋アトラス』という名前の地図帳が出版されました。その編者は海軍少将のパーヴェル・イワノヴィチ・クルゼンシュテルンでした。前者と異なり、後者の地名表記はフランス語です。サルィチェフのアトラスでは大東諸島が「*Ос-ва Бородинские*」となっているのに対して、クルゼンシュテルンのアトラスでは「*I-s Borodino*」という具合です。

両アトラスを比べてみますと、新発見の島々の命名原則に編者の態度の違いが見られます。サルィチェフの方はそれまで知られていなかった島を発見した人による命名の優先権を尊重しております。その時の世界周航においてポナフィジンはマニラからノヴォ・アルハンゲリスクへ向かう航海の途中で島をもう一つ発見しています。現在これは日本の、訳すなら「鳥の住む島」という意味になる「鳥島」にあたります。ですがロシア人の船長は発見したとき「三つの丘の島」という意味の名を付けました。彼は露米会社重役会に宛てた1821年1月26日付けの公式書簡で、「この発見によって全聖人島と聖フォーマー島の存在意義が損なわれることのないよう、またおのれの虚栄心におもねることなく、さらには航海者たちが気づきやすいように、私はこの島を『三丘島』と名付けました」と書いています。その当時すでに、全聖人島（すなわち*Todos los Santos*、現在は日本の須美寿島）や聖フォーマー島（すなわち*S.Tomas*、現在は日本の嬭婦岩）は知られていました。ポナフィジンは意図的に自分の乗るボロジノ号にこの二つの島の間を通る航路を取らせました。そしてその結果が3番目の島の発見につながったのです。サルィチェフの地図に載っている島は、すべての航海者たちにひとしく裨益するようにと願ったポナフィジンの善意のこもった名称のままです。しかしクルゼンシュテルンは彼の真心からの願いには応えず、自分の地図には「ポナフィジン島」と記しているのです。

ポナフィジン艦長は虚栄心からはほど遠い人でした。新発見の島に自分の名前をつけたりすることなど、決して望まなかったでしょう。私の見るところでは、「ボロジノ」という島名を思いついたのも、彼自身が公式に表明している、たんに乗っていた船がボロジノ号だったからという、単純な理由ではなかったのではないかと考えます。彼はボロジノ戦の同時代人でした。壮絶な戦いから数えてまだ8年しかたっていないからです。「ボロジノ」という名称は栄誉というよりはむしろ、犠牲者が膨大な数となったことを思い起こさせるものではなかったでしょうか。彼もまた、伝染病に罹ったせいではありますが、航海の全行程において総員122名中34名にのぼる海員および士官を失いました。この命名に私には犠牲者の鎮魂を願う気持ちが感じられます。

この発見から30年以上たってもボロジノ諸島には、海図にはっきりと記載されているので、そこへ立ち寄ってポナフィジンが詳しく記述した珊瑚島の存在を確認することはできたはずなのに、一人として、ただの一度も近寄ることはありませんでした。

ボロジノ諸島を最初に訪れたのはアメリカの遣日使節ペリー提督の遠征隊でした。それは1853年6月末のことで、ボニン諸島（現在、小笠原）から琉球へ戻る途中、突然ボロジノ諸島を見たくなくて、自分の艦隊をそちらへ向かうよう命じた時でした。アメリカ人乗組員たちは上陸しま



せんでしたが、これらの島々の緯度と経度を綿密に測定しました。

その翌年の1854年1月末、遣日ロシア使節のエウフィーミー・ワシーリエヴィチ・プチャーチンは、日本側代表たちとの会談で今後の展開に期待が持てそうだという確信をいただきました。そこで彼は、さしせまる露土戦争に関する必要情報を収集するためもあって、一時日本を離れることにしました。信じがたいことですが、まさにこの緊張の最中、すなわち同年2月はじめに、4隻からなる艦隊のうち唯一の汽走船であったヴォストーク号にたいして、上海における決められた任務を遂行した後ボロジノ諸島に赴き、植物採集を含む様々な調査活動を行うよう命じました。

アメリカとロシアの遣日使節はともに、いわゆる「鎖国」をしていた日本と外交・通商関係を樹立するという実現困難な目的があったのにもかかわらず、おそらくは自分たちの海図を見ているうちに偶然発見したであろう「ボロジノ諸島」の存在を確認するために特別に貴重な時間を割いたのでした。これには「ボロジノ」という言葉が二人の軍人航海者に対してとりわけ効果を発揮したのは疑いのないことです。

私個人としては、ボロジノ諸島の発見と再確認に功績のあった人たちがみな、その土地の確保に興味を示さなかったという事実には驚かされました。もしかしたら彼らはそれどころではなかったのかも知れませんが、あるいはポナフィジン艦長自身が書簡の中で評価しているように、「すべての航海者たちにとって有益なものはない」とありそうになかったからかも知れません。しかし一つだけは明白なことがあります。ポナフィジンの言葉には拡張主義者の意図の影は毫も見あたらないということです。プチャーチンにもそのような類の意図はありませんでした。サンクト・ペテルブルグの植物学研究所にはヴォストーク号の船医であったヴェイリフが採集した植物標本が保管されています。それらは純粋に学術的な目的で植物園に贈呈されたものです。水路図制作者のサルィチェフも新しい地図を編纂したのはロシア帝国のためというよりは、全世界の航海者たち共通の幸福に資するためであったと思われる。

このようなのんびりしたメンタリティーの時代はとうの昔となりました。しかし私には真実は真実のまま残っているような気がします。すなわち、人々はかならずしもいつも、今日のようにちっぽけな土地を奪おうと猛獣のように戦ってきたわけではなく、その土地はそもそも特定の個人に帰属するものではなかったし、食指を伸ばすようなものではなかったのだという真実です。

ところで、日本のボロジノ島と太平洋に点在する他の島々との関係についても面白い情報がありますのでお伝えしたいと思います。私の報告の中では「ボロジノ諸島に最初の移住者が上陸したのは1900年だ」と言いました。これは八丈島出身の方々です。それを先導した人は、非常に大きな野心を持った企業家である玉置半右衛門という方です。彼は最初に小笠原を無償でもって土地を借り受けて、それを開拓したいと思ったのですが、結局政府は彼にその開拓を許しませんでした。私の報告でふれた「三丘島」はアルバトロスという鳥の生息地でした。彼は八丈島から移り住み、八丈島出身者を雇ってそこで羽毛を集める事業に手を染めました。良質の羽毛を持つ鳥はアルバトロスといい、日本名は「アホウドリ」です。あまりにものんびり屋で、簡単に捕ま



えられるものですから、そのような差別的な名前と呼ばれるようになったそうです。しかしかに大量に生息していても、やがてこの鳥は絶滅します。彼がその後さらに南にあった小笠原諸島に目をつけたのはそういう事情があったからです。小笠原開拓は出来ませんでした。彼は今度はなんとか大東島開拓の許可をとりつけます。八丈島や沖縄から労働者を募って大東島開拓に着手したのです。サトウキビ栽培に成功してここに製糖工場を作るまでになりました。このように、現在日本領になっている北太平洋の島々は、この空間に生きていた人々の活動の場として、有機的につながっていたのです。（拍手）

（黒岩） どうもありがとうございました。たぶん日本のボロジノ島について知っている数少ないロシア人に皆さんはなつたと思います。次は高田さんに、竹富町の海洋政策についてお願いいたします。

（高田俊誠） 私は沖縄県の竹富町から来ました高田です。まず竹富町の位置をご覧ください。竹富町の位置はこちらになります。サハリンは地図に載っていませんけれども、3,300キロほど離れておりまして、さらに遠いところになります。竹富町は人口4,000名ほどの小さな町で、九つの有人島と七つの無人島、全部で16の島々からなっております。主な産業は観光とサトウキビ、パイナップルといった農業です。

年がら年中通してとても暖かい季候で、冬場はだいたいこちらの夏の気温と大差がないとは思いますが、冬場はだいたい18度ぐらいが平均です。ですから真冬に半袖、短パンですぐそのまま海へ飛び込むのはまったく問題がありません。

竹富町は台湾とも近いものですから、遠くの台湾の方がそのまま住んでいらっしやいます。かくいう私も実は台湾の血を引いていまして、クオーターになります。ですから国際結婚のハードルは高くないと思います。私は独身なので、ぜひ日本に興味があるという女性の方は旅行にいらっしやってください。

さて竹富町の九つの有人島の名前を紹介したいと思います。こちらが竹富島、黒島、ここが新城島、上地、下地島です。そして有人島で日本最南端にある波照間島です。こちらが鳩間島、小浜島、そして西表島で、私の出身はこのあたりです。西表島は沖縄県で2番目に大きい島です。

私ども竹富町はこういった多くの島を抱えているものですから、竹富町でありながら、役場は石垣市に設置されております。私は竹富町の職員ですが、石垣市民になるんですね。こういった形態を取っている市町村は日本でも三つだけになります。竹富町は海に面しているものですから、こういった日本の海洋立国の礎として、竹富町独自に竹富町海洋基本計画というものを制定しております。その中でこの1から23の項目を作っておりまして、その中で2010年から2014年までの4年間で、この挙げているものを先にやる重要課題として今進めています。

全体を紹介する時間がないので、今回は1番の海外漂着ごみ問題と外来生物の問題をお話しします。竹富町は離島が多くあるものですから、島にたくさんのごみが漂流します。

2. 実施施策—海岸漂着ゴミ対策



—NPO・地域住民による海岸清掃—



—発泡スチロールからスチレン油をつくる—



—移動式油化プラントの実証実験—



—子ども達の環境教育—



—スチレン油で稼働する船あめ機—



—船舶でえい航される発泡スチロール移送実験—

その中の約4割から6割近くは発泡スチロールになっています。その発泡スチロールを普通に処理しますと、1平方メートル当たり1万円ほど予算が掛かってしまうわけです。けれども、この移動式油化プラントというトラックに載せてある装置を使って、これをスチレン油という軽油に近いものに変換することができます。

この装置を使って、本来ならお金を掛けて処理していた発泡スチロールが油に変わるものから、これがだいたい15立方メートル当たり15万円掛かったものが、6,000円分ぐらいの価値のある油に変換されるので、有効活用ということになります。特に島がいっぱいありますので、島の間を輸送するコスト、これも大きかったんですが、船で引っ張ることによってそういった輸送コストを軽減するという措置も取られて、非常に役立っています。

漂流ゴミだけではなくて家庭から出たごみを各家庭から集めて、さらにそれも有効利用するという取り組みもしております。そういったことが評価されまして、政府の方から補助のお金も出まして、そういったものに役立っています。

次に外来生物について説明したいと思います。竹富町では、リゾートホテルで飼育されていたインドクジャクが脱走し、生態系を壊しているという問題が発生しています。インドクジャクは雑食性でいろいろな竹富町固有の動植物とかを荒らして、大変な問題になっているものですから、銃を使った駆除やわなを使った駆除を用いて、今撲滅作業を展開しているところです。今捕らえたクジャクは殺してしまってこれを埋めているんですが、お肉等もあまりおいしくないということで、有効活用がなかなかできないということで、もしロシア料理でクジャクを使っているようでしたら、教えていただけないでしょうか。ないですか。残念ですね(笑)。



クジャク専用の罠を開発し、捕獲作戦を実施。
その効果に疑問視する声もあったが、実際に罠一基で50羽以上も捕獲できた例もある。
一方で、罠一基の製作費や維持費の高さなどがネックとなっている。さらにクジャク自体の個体が減るにつれ、効果が表れにくいなどの問題もある。

やはり最初のうちは罠もクジャクの数が多かったのが効果を発揮していたんですが、全体的な数が駆除をしていくうちに減りまして、この効果も薄れてきて、次なる段階にまた移行しているところです。

(通訳：大島剛) 何羽ぐらいいたんですか。

(高田) 1,000羽以上じゃないですかね。このわなでは500羽とかも取っていたりするので。完璧な数は分かってないと思います。

(通訳：大島剛) 最初は4羽だけ。

(高田) そうです、4～5羽でした。数が増えた原因としては、大型の肉食系の動物がいなかったり、あとインドとまったく緯度的に変わらないという温暖な気候で、餌も豊富だったという要因が挙げられています。まだ正式には決まっていなくても、次の段階では動物、犬を使った計画もあります。ただ、ちょっと時間とお金が掛かるものですから、まだ正式には決まっていません。その間にまた増えるかもしれないです。

最後になりましたが、竹富町は自然環境と人との調和ある発展を目指して、これからも頑張っていきたいと思っています。それと最後に一つ紹介したい沖縄の言葉があるんですけども、日本列島とはまた違った文化を持っている沖縄ですから、言葉もまったく違ったものを使っています。その言葉に「いちやりばちよーでー」という言葉があります。これは、「一度会えばみんな兄弟」という意味です。

私は普通に生活していたらサハリンまで絶対来られなかったと思います。こういった良い経験を生かしてこの北のロシアと私たち南の竹富町が交流できればと思っています。たくさんの兄弟をこれから増やしていきたいと思っていますので、ぜひよろしく願いいたします。どうもありがとうございます。(拍手)

(黒岩) どうもありがとうございました。

今日の報告者の皆さんは大変協力的だったので、ちょうど50分までの時間がフリーディスカッションとなります。それでは、ディスカッションに移りますが、どなたでもご意見、質問でもいいですし、発言なさってください。この場合も一応、通訳込みで制限時間を5分でお願いしたいと思います。挙手していただいて、お名前と所属をおっしゃって、それからコメントをお願いします。午前の部のフリーディスカッションはなかったもので、第1部と第2部、全部合わせて自由に発言していいということで、今日全体のセミナーに関してのご意見をお願いします。

(セルゲイ・ポノマリョフ) こんにちは、皆様。私はセルゲイ・ポノマリョフと申しまして、今、サハリン州政府で仕事をしています。しかしながら、ここでは私はロシア地理学会のメンバーとして発言させていただきます。私はサハリン州政府の国際関係で長年仕事をしている中で、フェリー航路についてもいろいろと携わってまいりました。そういう点で日本とロシアの玄関口を支えておりますフェリー航路やフェリー航路を使った友好交流の発展についていつも支援しております。



稚内、ネベリスク、コルサコフ、ユジノサハリンスク、これら姉妹都市の関係の今後の発展は将来的に新しい形でどんどん進んでいくのではないかと思います。稚内、コルサコフのフェリー



航路については、十分に採算が取れる状況にはいかないにもかかわらず、稚内市のビジネス界、そしてまた稚内市の方で赤字を補填しながらずっと維持をしてくださいまして、それに対して感謝を申し上げます。

しかしながら、これは将来への投資だと思っております。これは一つのロジスティックなつながり、すなわち、サハリンとユーラシア大陸がつながり、サハリンと北海道がつながっていくという将来に向けた流れの一環ではないでしょうか。考古学者は「宗谷海峡は、昔は沼地で、人が歩いた時代があった」と言っておりますけれども、今はそういうことがありませんので、人々が努力して私たちの環境を今発展させております。

今回、日本の中央の方、また別の地域からも学者の皆様がこうやって参加して、こういう新しい形で会合が持たれたかと思いますが、「19世紀の段階で日本とロシアの文化的な交流、幅広いものがあった」という木村先生のご報告もありました。私が申し上げたいのは、今まで日本とロシアの実務的な人たちの会合がよく行われたわけですが、そういう中で今回のように学術界の方々がかかわることによって、新たなサハリンと日本との交流の発展につながっていくということです。

今、私たちは名前のない島の問題について、この問題にかかわっております。そういう名前のない島がサハリン州内でも約200あります。沿岸地域の開発の中で、「島がどうかかわりの歴史を持ち、どういう名前を持っていたのか」ということを、日本でもいろいろな形で研究されていると思うんですが、そういう経験を私たちも学んでいかなければならないと考えます。

皆さんがやっていることは将来にとって非常に大事な仕事でございますので、こういう形態でのこれからの活動については、ロシア地理学会サハリン支部の方で前向きに対応できるということをここで申し上げておきたいと思っております。ですから今後こういうセミナーが開催されるときには、うちの地理学会の方からも参加者がもっと増えてくると思っておりますので、その中で私どももサハリンの報告や発表をすることができると考えます。それが日露関係の経済、また文化の交流の発展につながっていくと思っております。

約20年間にわたって通訳をしてくださる大島さんに、あらためて感謝したいと思います。ほとんど同時通訳のように通訳してくださいました。本日こういう形でこの会合にご招待いただきましたことに、今回の主催者の皆様にあらためて御礼申し上げます。ありがとう。（拍手）

(黒岩) 次は五島列島で開催しますから、ぜひサハリンの皆様もご参加いただきたいと思います。暖かい島ですから。

(加峯隆義) 日本の福岡から来ました、九州経済調査協会の加峯と申します。午前中の報告で言及がありましたが、福岡と釜山について簡単にご紹介したいと思います。福岡と釜山の距離は210キロあります。対馬に次いで2番目に韓国から近い島です。ここもコルサコフと稚内と同じように、フェリーが1日1便、季節によって変動しますが、高速船がだいたい4往復で、飛行機が1



日5往復しています。人口は、福岡が150万人、釜山が350万人です。年間、この間をだいたい60万人が行ったり来たりしています。日常生活圏を築きたいというのがこの地域の思いです。一部の人たちは、例えば釜山の若い女性が福岡の美容室に予約を入れて、それで髪を切りに来ます。あるいは、ルイ・ヴィトンのようなブランド品の新デザインが出ますと、福岡の若い女性は釜山の免税店に予約を入れて、それを取りに行きます。あるいは福岡や対馬のマラソン大会に韓国人が、逆に釜山のマラソン大会に福岡の人が参加します。釜山の大学で非常勤をしている福岡の大学の先生が毎週講義で通っていますし、釜山の大学関係者が福岡の高校を回って学生募集をしています。我々福岡と釜山でも人の交流はまだまだ伸びしろがありますが、経済交流が人の交流ほど進んでないというのが問題です。だから、このあたりは我々の知恵を絞って交流を進めていきたいと考えています。

最後にご案内です。今年の11月13日から16日にかけて、福岡と釜山でBRITという国境に関する国際会議を開きます。途中1日、対馬を縦断して、韓国に渡る計画を立てています。結構、参加者は増えていますが、おそらくサハリン枠といったものも作っていただけたと思いますので、ぜひ皆さん福岡、釜山へお越しください。ありがとうございました。(拍手)

(田村慶子) 同じく日本の九州の福岡にあります、北九州市立大学に所属しております、田村と申します。二つ短い質問をしたいと思います。まずサハリン大学のセルゲイさん、もしいらっしゃいましたら。ご報告されたこととはちょっと違うので、今からお伺いすることは失礼かもしれませんが、サハリン大学、もしくはサハリンにあるほかの大学で、日本を含むアジア研究はどのようになっているのかを、もしご存じでしたら教えてください。

それともう一つの質問は、みちのくカンパニーの對馬さんにお伺いします。みちのく銀行がこちらに進出されて、2008年に撤退されたと先ほど伺いましたが、その5年間のみちのく銀行のビジネスは、「かなりうまくいっていた」と先ほどおっしゃいました。では、撤退の原因は何だったのかということと、その撤退が残している教訓、つまり今後サハリンのビジネスをするときにもし教訓があれば教えていただきたいのが二つ目です。

それと最後はお願いですが、今私たち日本人は、もちろんロシアの方もそうなんですが、お互いに訪問するときに観光でもビジネスでもビザが必要です。先ほど72時間のビザなしの交流をというお話がありましたが、72時間では短すぎますので、ぜひ5日間ぐらいにお互いの訪問が自由にできるように延長していただければ、もっと多くの日本人がこちらに来る可能性がありますし、お互いのビジネスや観光にとってもいいのではないかと思います。72時間は短すぎるので、今後延ばしていく方向でもっと二つの国が知恵を絞っていただければと思います。よろしくお願ひします。

(ベルヴェヒン) まず今のご質問の答えとして最初に申し上げたいのは、サハリン国立大学の方では東洋学部があるということです。主に通訳を輩出しています。中国語、韓国語、そして日本語



です。ただ、主な対象として考えられるのは韓国人ですね。というのは、こちらには現在、朝鮮系、韓国系の人たちが約6万人暮らしているからです。そういう地域特性の中で最初に韓国の文化、歴史を勉強、研究するというのが主眼になっています。

それ以外にも当然、アジア太平洋地域の各国々の勉強をしています。私たちの隣国、隣人になります中国、そしてまた日本を第一義的に行っています。うちの学生は、本当に一生懸命いろいろなことを勉強している中で、やはり勉強の対象というのはどうしてもアジア太平洋地域、これに集中しています。例えば法学、法律を勉強している学生だったら、自分たちの国の法律だけではなく、やはり境界を接している国々の勉強も一緒にします。

学習科目の中で、日本、韓国、中国の法律という講座もあります。それから教育学で勉強しているところもありますし、日本、中国、韓国の歴史や文学を勉強しています。こういう形でアジア太平洋地域のことをカリキュラムにして勉強していくというのが特徴ですが、一応それでお答えしたことになりますか。（拍手）

（對馬）なぜみちのく銀行が撤退したか。本音と建前があるんですけど、建前だけ申し上げますと、一つは銀行の場合、自己資本比率というものに縛られております。今、海外に拠点を出す場合の国際基準は8%です。国内だけで仕事をする場合は4%で良いのですが、いずれ国際基準が8%から10%に引き上げられるということは、「海外に現地法人を持つ場合は、10%以上の体力がないと駄目だ」ということになります。

それで、海外に店を出すところは国際基準の8%に引っ張られるのですが、実際はどこの銀行もだいたい10%台です。それがいずれ国際基準が大幅に上がってきますと、今度は12%ぐらいの健全性を求められてきます。それは相当な負担がかかります。今のこの経済情勢もあって、いわゆる海外の事業見直しをして国内に特化すべきと判断し撤退したということです。（拍手）

（ポノマリョフ）実はロシア政府は数年前に、一方的にこの72時間のビザシステムを、稚内ーコルサコフのフェリー航路のためにつくりました。日本側は最初の2年間は全然使わず最近になって使い始めたんですけど、このビザのシステム（72時間）を、おっしゃる通り、さらに延長するという問題提起は正しいと私は思っています。

ただ、ロシア政府は、最初にこのシステムを導入するに当たって、日本側にも同じようなシステムを導入するように呼び掛けてました。実現すれば、道北経済の発展にも貢献することができるわけです。

私自身、北海道副知事の多田健一郎さんと以前この話をしたこともあるんですが、皆さんうなづくばかりです。すでにビザなし交流、クリル諸島と日本の人たちの交流はすでに20年間続いております。ですから、そういうビザなし交流も5日と言わず、7日でも構わないですけど、そういう時間的な規制がなくて、完全にノービザで北海道、サハリンの人たちが行けるようになる方向で問題は解決すると思っています。



20年前、フョドロフ・サハリン州知事がいたときに、彼と一緒に稚内に行ったことがございます。1990年8月に行きました。その時お会いした方がこの会場にもいらっしゃいますね。その後のサハリン州知事も一貫して、ノービザの適用を日本側に提案しております。ですから、すでにボールは日本側にあります。今日のさまざまな報告の中でも言われておりましたけれども、サハリンの人たちの平均収入、すなわち支払い能力の高さというものは多くの方々が理解されておりますので、そういうお金を持っている方々は、お金を使いたい、使う用意がある。ですので、ぜひそれを有効活用していきましょう。(拍手)

(黒岩) 石田さんに小笠原の話をしていただいて、終わりにしようと思います。

(石田和彦) こんにちは。小笠原からまいりました。皆さん小笠原を、特にロシアの方々はご存じでしょうか。日本の首都東京の中にあリまして、南へ約1,000キロ、船しか行くことのできない、日本で一番遠いというよりも時間のかかる場所です。首都東京というのは、200メートルぐらいある高さのビルが連立しているような地域ですが、1,000キロほど海の彼方を離れますと、自然がとても豊かで昨年6月に世界自然遺産に登録されました。

「なぜ首都東京の中にある島が世界自然遺産になったか」と言いますと、固有種がたくさんあるからです。大陸と一度もつながったことのない独立した島ということで、小笠原にしかない動植物がたくさん生存しております。植物でいいますと、ムニンノボタンだとか、それからヒメツバキ、こういった小笠原にしかない植物がきれいで小さな花を咲かせます。それから世界中で母島にしかないメグロという珍しい鳥がいます。

太平洋の1,000キロから1,200キロの中に30余りの島々からなる小笠原諸島、ぜひ一度、ロシアの皆さんもお越しくください。隣の国の友好国であります日本の4番目の世界自然遺産です。知床、それからブナ林で有名な白神山地、それから屋久島。その次に小笠原があります。ぜひ1,000キロ離れた小笠原にいらしていただきたいと思います。ただし、船しかありません。飛行機がないんです。25時間半、船に乗っていかねばなりません。非常に遠い旅になりますが、ぜひ小笠原にいらしてください。

ありがとうございます。(拍手)

(黒岩) たぶん小笠原に行くには、72時間とか5日じゃなくて240時間ぐらいのビザなしの期間が必要じゃないかと思います。ありがとうございました。



(岩下) 今日は朝から6時間ぐらい、非常に密度の濃いセミナーに多くのロシアの方に最後までお付き合いいただき、心よりお礼を申し上げます。このセミナーを終える前に最初に申しましたように、次回、私たちがセミナーを計画している五島の紹介を少しだけさせていただきます。残念ながら五島は隣のどこかの外国に直接渡ってセミナーをするということができないのですが、日本の非常に重要な境界地域であります。

(久保実) 皆さん大変お疲れさまです。五島市の久保と申します。よろしくお願ひします。最後になりましたが、次回開催地となりましたので、最後のスピーチをさせていただきたいと思ひます。

五島市の人口は約4万人で、11の有人島と52の無人島、63の島でなっております。中国、上海まで約700キロで、歴史的には1,000年以上前に遣唐使がここをわたって長安まで行ったという歴史がございます。1,000年以上前はそういう交流がありました。現在はほとんど中国との交流はございません。ただ、最近では国境境界をめぐる中国漁船がこの近海で操業して拿捕されるという事件が起きております。

そういう難しい問題がございますが、我々としては1,000年以上前に交流があった中国との交流を復活させて、しっかり経済的にも人的にもいろいろな交流を今後やっていきたいというふうを考えています。今日のセミナーはこれで最後になりますが、サハリンの方は3~4週間ほどバカンスを楽しむということです。たぶんロシアの方で五島に来られた方は過去にいらっしやらないかなと思っておりますので、ぜひ五島まで足を運んでいただければと思っております。よろしくお願ひします。ありがとうございました。(拍手)



(岩下) ありがとうございます。長時間にわたる会議も終わりを迎えています。この会議の冒頭で言いましたように、JIBSNというのは日本の境界地域のネットワークですが、JIBSNの「I」はインターナショナルです。つまり日本だけで内向きにやるのではなくて、あくまでも隣の人たちと常に開かれた形でネットワークをつくるということを目的にしています。

今日のお話の中でサハリンと北海道が昔は地続きだったという話がありましたが、それは日本列島全体にも言えることでありまして、逆に言いますと、「日本は韓国やそのほかの地域とつながっていたので、ユーラシア国家の一部であると捉えるべきだ」と私は思っています。その意味でオホーツク海、日本海、東シナ海から南シナ海、それから太平洋という周りの海は、ある意味でユーラシアの海として全体をとらえるべきではないかと個人的に考えています。

午前中にも申しましたように、東アジア、それからユーラシアというのは、境界地域の研究のつながりが非常に薄いところなんです。世界中にはさまざまなネットワークがあるんですが、ここにはないということで、私たちはそれを隣人たち、つまり中国なりロシアなり韓国なり台湾の方々とつくっていくということを大きな目標としていて、その中にこの日本のJIBSNがあります。

そういう意味では午前中にも申しましたけれども、対馬で韓国の方たちと議論をし、与那国で台湾や中国の方と議論をし、そして今日、サハリン、稚内でロシアの方たちと議論をしたことで、この次の写真に今日のシーンが新たに加わることになります。そういう意味では、今日のこの会議は記念すべき会議となりました。この会議の成功のためにご尽力いただいた稚内市の佐藤課長、それから商工会議所の今村会頭、そして北海道のシンクタンクである高田さん、それからみちのく銀行の対馬さんほか、多くの方々に心よりまずお礼を申し上げます。それから今日、本日ここに来てくださったすべてのロシアの皆さんに、あらためて心よりお礼を申し上げます。

この11月に日本と台湾、中国、韓国、ロシアといった周りのお付き合いを発展させて、先ほど福岡の加峯さんからご紹介がありましたが、この11月に福岡と釜山、対馬をつないでボーダー・リージョン・イン・トランジション (Border Region in Transition : BRIT)、世界の境界地域の研究ネットワーク第12回大会を初めてアジアで開催します。

世界に40カ国から200名の研究者、実務者の方が、最初の2日間、福岡で会議をやって、チャーター船で対馬に行って、対馬を視察して釜山に入り、釜山で会議を終えるという企画です。中国の方、ロシアの方、フィンランドの方、それから北米、EU、あらゆる大陸の方が参加されます。インドや東南アジア、オセアニア、アフリカからも参加があります。福岡では「漁火」という対馬の市長が肝いりでつくった市民劇団が公演していただきます。

日本と韓国は今、政治的にいろいろなことを言い合っているようですが、私たちの会議は開かれた国際会議であり、延期になったり中止になったりすることはないと確信しています。国際的に参加する方では誰一人、「延期の可能性はありますか」という問い合わせが来ることはありません。私たちの会議は、境界地域に住む人々の声を聞くというテーマで、そこに暮らす人々の考えること、その人々の利益を中心に議論するものであります。



日本は周りを海に囲まれていて、特にこの8月はさまざまな政治的な問題が起きました。しかし私たちのJIBSNはそういう問題にかかわりなく、人々と人々、境界地域に住む人々の声を束ね、一緒に協力し、地域全体を発展させていく、安定させていく。そのことがユーラシアの中の日本、ユーラシアの中の東アジアということにつながると確信して、みんな今日ここに来ております。

最後にこの長時間、長い間、ほぼ一人で通訳をしてくださった、日本の三本の指に入る名通訳の大島さんに拍手をお願いします。(拍手)

今日のこの会議は私たちの地域を越えた新しい関係づくりのネットワークの始まりであり、ロシアの友人たちとともに今後一緒にこういう活動を続けていければと心より願っています。今日は本当に長時間、ご参加いただきありがとうございました。(拍手)

ロシア側参加者一覧

KHAN Dmitrii (サハリン州政府)

MASHUKOVA Liudmira (サハリン・メディア代理店「スペクトル」社長)

PERVUKHIN Sergei (サハリン大学)

SHOKAREV Ivan (弁護士：日ロ BIZ サポートネットワーク)

CHERNUKHIN Dmitrii (法律家：日ロ BIZ サポートネットワーク)

MAKAROVA Dina (稚内クラブ会長・投資会社サハリンエネルギー)

SAMOUKOVA Elena (サハリン国際EXPOセンター副所長)

ZALPIN Pavel (ガス会社ライトデコール)

BESPALENKO Inna (稚内市サハリン事務所)

NAM Svetlana (北海道サハリン事務所)

TIMOFEEVA Anna (北海道新聞サハリン支局)

PONOMAREV Sergei (ロシア地理学協会)

KHRAMUSHIN Vasili (ロシア地理学協会)

CHAICHENKO Tatiana (サハリン郷土博物館)

NEDOREZ Iurii その他、サハリン州出入国管理関係者ほか

日本側参加者

北海道、稚内、根室、小笠原、福岡、対馬、五島、竹富、与那国ほか境界地域の行政・ビジネスならびに各大学関係者及びJIBSN個人メンバーほか



サハリン・リトリート スケジュール

- 8月27日(月) 移動日：稚内～コルサコフ～ユジノサハリンスク**
- 08:00 稚内国際航路ターミナル集合
- 10:00 ハートランドフェリー「アインス宗谷」にて出港
- 17:30 コルサコフ到着(現地時間：時差+2時間)
入国手続き後、専用車でユジノサハリンスクへ移動
- 19:00頃 市内レストランにて夕食
- 20:30頃 ホテルチェックイン
- 8月28日(火) サハリン・セミナー**
- 8月29日(水) サハリン視察 1**
- *コルサコフ(旧大泊町)
旧拓銀大泊支店、亜庭神社跡、郷土博物館
 - *プリゴロドノエ(旧深海村)
LNG工場・積出港(外から見学)
日露戦争日本軍上陸地の碑、旧日本軍トーチカ跡
 - *ユジノサハリンスク市内視察
サハリン州立郷土博物館(旧樺太庁博物館)、戦勝記念碑(樺太神社跡)
統治時代の建物(豊原医院、樺太守備隊司令官官舎、拓銀)など
自由市場、シティ・モール(大型商業施設)など
- 8月30日(木) サハリン視察 2(オプション)**
- *ホルムスク(旧真岡)視察
- 8月31日(金) 移動日：ユジノサハリンスク～コルサコフ～稚内**
- 07:00 チェックアウト後、専用バスにてコルサコフへ移動
出国手続き後、乗船(朝食は船内で弁当)
- 10:00 コルサコフ出航(現地時間)
- 13:30 稚内到着(日本時間)
入国手続き後解散



リトリートの風景 II





*本レポートは、北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」及び笹川平和財団助成プロジェクト「境界地域研究ネットワーク JAPAN の設立」の成果の一部である。

JIBSN レポート No.3

「サハリン・リトリート」

編集者: 古川浩司 岩下明裕

協力: 大島剛(ルテニア) 合田由美子

発行日: 2012年12月7日

発行者: 外間守吉

発行所: JIBSN 事務局(北海道大学スラブ研究センター内)

〒060-0809 札幌市北区北9条西7丁目

Tel. 011-706-2382 Fax. 011-706-4952

<http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/>